

一九 樂訓抄

作者

【貝原益軒】 カヒバラエキケン。徳川時代の儒者且博物家。筑前の人にして、藩主黒田氏に仕ふ。名は篤信、字は子誠通稱は久兵衛、益軒はその號なり。父を寛齋といひ、同侯の醫官たり。益軒幼より學を好みて父兄の教を受け、又よく醫書に通ぜり。初め陸・王の學を修め、後陳獻章の學部通辨を讀みて得るところあり。遂に朱子學に歸す。しかもその間師あるなし。博覽強記にして究めざるなく、身を持する謙遜にして毫も學を誇らず。盛名一代に布く。益軒屢、福岡京都及江戸の間を往來し、又大に旅行を好みて廣く奇勝名區を探り、足跡殆ど海内に遍し。老年に及びて矍鑠衰へず。三代の藩侯に歷仕して禮遇極めて渥く、遂に骸骨を乞ひて京都に隠れ、正徳四年八月二十七日を以て家に歿す。享年八十五。

益軒好んで述作をなし、その數百有餘種に至る。經學に關するものを除きては、これを著するに多くは國字を以てす。これ讀者の解し易きを主とし、以て世俗を教へ、民用を利せんがためなり。その主なるものを擧ぐれば大和本草・憤思錄・大疑錄・自娛集・初學知要・小學備考・近思錄備考 願生輯安・主常訓・大和俗訓・和俗童子訓・初學訓・文訓・武訓・家道訓・樂訓・君子訓・養生訓・克明抄・格物餘話・神祇訓・古今知約・女大學・四書集註等なり。〔百科〕

出所

【益軒十訓】 一冊。西田敬止編、明治二十九年再版、博文館發行。二卷。塚本哲三編、有朋堂文庫一輯、大正二年、有朋堂發行。益軒全集八冊。明治四三—四四年、益軒會編。分つて五常訓・大和俗訓・和俗童子訓・初學訓・文訓・武訓・家道訓・樂訓・君子訓・養生訓、の十篇とす。何れも懇篤平易に説明す。

本課は、その中の樂訓抄である。「樂訓」(ラククン)は、全部三卷。總論・節序・讀書・後論の四篇に分ち、天地自然の興趣と人間の清樂とを説き、行文平易で、溫雅優美の趣に富み、興味が深い。

要旨

天地自然の美觀と人間の清樂とを説いた近世文を味はせたい。

光陰は箭の如し

大意

光陰は箭の如く早く過ぎ去るものであるから、今日の日の一念を惜しめよと説いたのである。

解説

【光陰箭の如し】 歲月の過ぐることの速なるに喩ふ。黄山谷の詩に、「日月過箭疾」とある。〔成語〕

【浮けること】 確かでないこと、偽りごと。

【老に向へば】 年がよつて來ると。

【さのみ】 そんなに。

【盡きなん】 「なん」は、完了「ぬ」の將然形

「な」に未來の「ん」の添はつた未來完了の形、

故に「盡きてしまふであらう」の意になる。

感想

【いくほどなき】 幾程もない、短い。

【過ぐさまほしけれ】 過したいものである。

【としどしに花は云々】 唐詩選、劉廷之の

詩、上欄参照のこと。

【老かさなれば】 年よつて來ると。

【しかず】 (身心ともに昔に)及ばない。

【かねてより】 前々から。

所謂雅文體であるが、そこにピンと來る作者の意志のひらめきが見える。兼好の「刹那覺えずといへどもこれを運びて止まざれば命を終ふる期忽に至る。されば道人は遠く日月を惜むべからず。只今の一念空しく過ぐる事を惜しむべし……。」とあるに思ひ合はせられる。

心風雅にして

大意

心風雅にあれば、物質的不滿を超越して、心自らゆたかなることを述べたのである。

解説

【風雅】 (一)詩の國風と大小雅と。轉じて、

詩歌の道。詞章。太平記一、儲王「慈鎮和尚の風雅にも越えたり。」詩經、關雎疏「化露」

一國「謂之爲風、道被四方」乃名爲雅。文

選、序「風雅之道、粲然可觀。」(二)みやびやかなること。俗ならざること。風流。文雅。

聖德太子繪傳記、五「後は歌人、風雅の山。」

〔天國こゝは(二)風流で上品なこと。〕

【めで】 愛し。

【蔬食】 ソシ。粗末な食物。

【肥濃なる】 肉などの肥えて脂濃い。

【淡薄なるは】 あつさりした食物は。

【布の衣】 木綿の着物。

【紙のふすま】 紙の蒲團。

【葎生ひて云々】 葎が生ひ茂つて、荒れ果

てたやうな粗末な住居。葎(ムグラ)は、葎草
(カナムグラ)。猪殃殃(ヤ、ムグラ)などの總

感想

「賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪へず、回や其の樂みを改めず、賢なるかな回や」てふ論語の顔回は正にかゝる人であつたらう。又、前漢書に「遺子黄金滿贏、不_レ如_レ經。」とあるのも思ひ合はせられる。

櫻のほころび出でたるこそ。

大意

櫻の美觀と、これを愛する心とを述べた。

解釋

【花に心はなけれど】 花に精神はないが。

【えならぬ】 何ともいふに云はれぬ。

【ながめなれ】 (よい)眺めである。

稱。因國

【風寒のうれひ】 風や寒さに就ての心配。

【架】 ガ。書棚。

【異花】 コトバナ。他の花。

【けぢされぬ】 壓倒されてしまった。

【日比】 ヒゴロと訓む。

「またせ／＼て」 人を待たせ待たせて置いて。

【あくまで見る程もなく】 十分に見る程の間もなく。

【よしさらば、の歌】 一首の意は、山櫻よ、お前はそんなに早く散つてしまふのか、よしそれならば散るまでは見まい、名残惜しさがいつまでも頭に残るから。お前の花盛りの様子をしっかりと自分の記憶にとめて置いて、

感想

兼好の、「花もやう／＼氣色だつ程こそあれ、折しも雨風打續きて心慌しく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまでよろづにただ心のみぞなやます。」といひ、又、「よろづの事も、始め終りこそをかしけれ。」とあるのが思ひ合はせられる。

みな月の比

散るまでも見ることはすまい、といふのである。

「面かけにして」は、しつかり自分の記憶にとめて置いての意。この歌は續古今和歌集にある。

【古の人】 この歌の作者藤原爲家を指す。

【後の思出にせんとにや】 追想の種にしようと思つたのであらうか。

大意

陰曆六月頃の自然の興趣を説いたのである。

解 釋

【みな月の比】 みなツキのコロ。「みな月」は、陰曆六月の異名。

【端居】 ハシキ。家の端近くに出で居ること。天國

【わらふだ】 藁蓋。ゑんざ(圓座)に同じ。

圓座は、藁・菅・藁などにて渦のごとく圓く編みたる座褥シヤク。天國こゝは座蒲團。

【池の心】 池の中心。

【花ならで夕風に云々】 花ではないが、夕風の吹くにつれて、その葉の香が漂つて來るのでさへ。

【花の笑の唇ひらけたるは】 花の唇が笑

つたやうに開いたのは。

【所せきまで】 あたり一ぱいに。「ところせし」は、(一)場所せまし。場所のせまきほどなり。(二)窮屈なり。氣づまりなり。憚り多し。面倒なり。(三)おもおもしきさまなり。仰山なり。(四)取り扱ひにくし。(五)もちあつかふ。困却す。天國こゝは(一)

【世に似るものなく清らなり】 世間にこ

れ程のものはない位清らかである。

【涼を逐うて】 涼しい所を探して。

【やすらひ】 休み。

【なつかしきに】 なつかしく吹く所で。

【むすび】 手に汲ひ取つたりして。

【いさぎよし】 (一)甚だ清し。汚れず。(二)

汚れたる行ひなし。卑劣ならず。潔白なり。

正し。(三)勇まし。立派なり。こゝちよし。

(四)わるびれず。未練なし。天國こゝは(一)

感想

加藤千蔭が「なべて世のにごりにそまで住む人の、友と見るべき花ぞこの花」と詠んだ。心高潔な風流人には唐日本ともにこの蓮を愛賞した。月もさうである。上田秋成が月あかき夜鴨川に杖を曳いた文に、「音をしるべにとめくれば、むべも清しとて人々手にむすびなどして遊ぶ。」とある。まるで純な童心である。よろづ忙しく、齟齬としてゐる現代人は殊に心のゆとりが必要であらう。

(三)「こゝちよい」とか、「すがすがしい」の意。

【遣水】 ヤリミヅ。庭などに、水を導きて流

しやるもの。庭園に造る流水。天國

【いみじう】 甚だし。勝ぐれたり。いちじる

し。天國こゝは大層位の意。

【心ゆく】 氣がすむ。満足す。天國

二〇 文訓抄

作者

【貝原益軒】 前課を参照ありたい。

出所

【益軒十訓】 本課はその文訓抄である。「文訓」は、全四卷。作者が晩年文武二道中の文道に關し、平常の教訓となるべき事を、一般人の分り易いやうに説かれたものである。

要旨

文道に關する教訓を知らせると共に、近世文を味はせたい。
ふみ見ること

大意

讀書の心掛と利益とに就いて説いたものである。

解釋

【いつともわかず】 いつといふ區別なく。

【つねにして】 常のこととして。

【三餘の時】 上欄参照。董遇の云つた言葉で、書を讀むによい時をいふ。

【事しげく】 事務の多いこと。

【經傳】 經は人の道を説いてある書物、傳は左氏傳の如く、註釋書のこと。昔から九經三傳など云はれて儒家の學ぶべき書としてゐた。

感想

尙、翁は讀書の樂みに就て、「世の人この樂を知らず、大いなる不幸なり。譬へば、日本にゐて富士の嶽・吉野の花を見ざる人だに、見せまくほし。況んや、世の人にこの書を見せまくほしく、この道をしらせまくほし。人となりて書を讀まずして、この道をうかがはざる人は、きはめて不幸の人に

【まのあたり】 目の當りの義、目前にの意。

訓讀

【狄仁傑】 テキジンケツ。上欄参照のこと。

【名教】 メイケウ。儒道の教。人倫の名分を明かにする教。天國五倫・五常の如く名目を立てゝその道を教へる故にいふ。「狄仁傑の云々は、狄仁傑が嘗て「名教の内に至上の樂がある、どうして俗人と語る事を好まうか」と云つたのは尤もなことである。

て、人となれる樂なし。あはれむべし。」と云つてゐる。翁の文だけあつて、その理は何人にもわかり易く、又、翁の高雅な趣味、懇切な心情が、よく文中にあらはれてゐる。

知らぬさましたるぞよき

大意

何事も控え目にすべきを説いてある。

解説

【私にひかれて】 自惚心にひかれて。

【我が心に許し難し】 自分の心で何事も知つてゐるとは許し難い。

【子路は云々】 子路は、その字で、本名は仲由、孔子より九歳の年少で、孔門中勇者として知られてゐた。こゝは、論語爲政篇に、「子曰く、由よ、汝にこれを知るを誨へんか、これを知るを知ると爲し、知らざるを知らずと

爲す、これ知るなり。」と見えてをる孔子との問答を指したのである。

子路が知らない事を知つたふりするのは、偽つて知つたふりするのではない。自分の心では眞實知つてゐると思ふけれども、子路は氣質が粗放で綿密でないからして、誤解して既に知つてゐると考へてゐるのである。一圖に思ひ込んでしまふと、未だ知らぬことを

も、既に十分知つてをると思ひ誤ることが多い。すべて物事の道理といふものは、一重や二重ではない浦の濱木綿の様に幾重にも深くつゝまれて奥には奥のあるものだといふことを考へて見るがいゝ、の意。「由」は、子路の諱で、子路はその字。

【心くはしからず】 心の粗放なこと。

【浦の濱木綿】 ウラのハマユフ。濱木綿は、はまおもとの異名。石蒜(マンジュシヤケ)科、はまおもと属の常緑草本。大なるものは

感想

めい／＼に深く省みる必要があらうと思ふ。誰しもかやうに、自分は知つてゐる、確かだと思ふことに飛んでもない間違があるものだ。

富貴の子として

莖の高さ四五尺に達す。莖の上部に、稍おもとに似て潤大なる葉數枚を出だし、夏日その葉心より花莖を抜き、梢頭に傘形をなして十餘花を開き、六瓣にして白色なり。我が國暖國の海岸に自生す。はまもめん。萬葉、四「みくまぬの浦の濱木綿もゝへなす、心はもへどただにあはぬかも。因圖こゝは、物の道理は浦の濱木綿の葉の幾重なるが如く、奥には奥があつて單純なものではないの意。

大意

富貴の家に育つたものゝ兎角陥り易い缺陷をあげて文教の貴ぶべきを説いたのである。

解 釋

【つかさ】 官。司。(一)やくしよ。官廳。官署。官府。(二)つかさびと。官吏。官人。役人。(三)やく。つとめ。官。職務。(因國こゝは(三))

【かうぶり】 冠。かがふりの音便。(一)かんむり。(二)位階。(三)五位に叙せらるゝこと。叙爵。(四)ねんしやく(年爵)(五)うひかうぶりの略。元服。(因國こゝは(二))

【世の中さかりに】 世の中に勢盛んに榮達し。

【おごりならひぬれば】 驕ることが習慣と

なつてしまふと。

【うき世のはかなき云々】 俗世間の下らぬ遊藝にのみ心を移して。

【しづかなるつとめに】 落ち着いてやるつとめに。

【まめやかに】 忠實。(一)まめなるさま、まめまめしく働くさま、親切なるさまにいふ語。眞實。まじめ。(二)假初ならざること。一時ならざること。まこと。(因國こゝは(一))

【驕樂】 ケウラク。おごりたのしむ。

【今のががみに】 現在我が身を處する上の

手本に。

【すべきやうなし】 しようとしてもすべき方法もない。

【はかなくて】 つまらなく。

感想

兼好の所謂、官位とか形式とかはどうでもよい、價値は箇人にあるといふ思想とよく似てゐよう。

「ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又、有職に公事の方、人の鏡ならむこそいみじかるべけれ。」とでもいひたい。

かたちうるはしく

大意

容貌・言語は如何に立派なりと雖も、無學では結局つまらぬ、人には見下され、下等の人物に見えるものだと説いてある。

解 釋

【かたち】 なりふり。姿。容貌。(因國

【物よく言ひ】 口の達者なこと。言語のつか

ひこなしに上手なこと。

【まれ人】 容。まらうどに同じ。稀に来る人の義。他より訪ひ來たりたる人。まらびと。

まれうど。まらと。〔天國〕

【人のもてなしよく】 人の接待が上手で。

【ふるまひうるはしく】 動作が上品で。

【かたこといひて】 間違つたことを云つて。

「かたこと」は、片言。一語の半。言語の不

完全なること。〔天國〕

【あさまし】 (一) 浅はかなり。思慮深からず。(二) 意外の事にて驚く。肝つぶる。(三)

興さむ。呆れかへる。けしからぬ。(四) いや

し。きたなし。さもし。卑劣なり。〔天國〕こゝ

は(三)興さむ。情なくもの意。

【下さま】 下等の人物。

【口惜し】 残念なことである。

藥想

「二四、安井夫人の條、一二〇頁の三行目に、翁は自分の經驗からこんな事をも考へてゐる。それは若くて美しいと思はれた人も、暫く交際してゐて、智慧の足らぬのが暴露して見ると、その美貌は何時か忘れられてしまふ。又三十になり、四十になると、智慧の不足が顔に現れ、昔美しかつた人とは思はれぬやうになる。之とは反對に、顔貌には疵があつても、才人だと、交際してゐるうちに、その醜さが忘れられる。又年を取るに従つて、才氣が眉目をさへ美しくする。」とあつて才氣を高唱して

ゐるが、兼好は、「人は形・有様のすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ、物打ち言ひたる聞きにくからず、愛敬ありて、ことは多からぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそ、口惜しかるべけれ。……形・心さまよき人も、才無くなりぬれば、品下り顔憎さげなる人にも立交りて、かけすけおさるゝこそ、ほい無きわざなれ。」と云つて、容貌の大切なことも併せ説いてゐるが、結局これも才の大切なこと、文教の必要なことに終つてゐる。が、兎に角無學な爲に自らの價値を損じてしまふことは争はれぬ事實である。

挿

繪

仕^フ君之道、盡^シ己致^シ身、日夕惕若、以事^ニ一人^ニ。

只原益軒書

二二 武林唯七へ

作者

【武林唯七の母】 浅野長矩の乳母。名不詳。

出所

【赤穂義士書簡集】 寫本八冊、義士の書翰及び色紙・短冊等を集む。本課は、復讐の義心を勵ます爲の自叙に際しての遺書で、第四冊目に出てゐる。「武林唯七母の書置」と題す。本文は有朋堂文庫新撰書翰集にも收めてある。

要旨

一つには亡君長矩公の後を追うて、黄泉への御供をなし奉り、一つには我が子唯七をして後顧の憂なからしめ、且は仇敵への復讐心を一層激發せんが爲め悲痛なる一通の遺書を認めて自叙せし悲壯なる烈婦の健氣なる心事を讀察せしめて、やゝもすれば情弱に陥り、利己的に走らんとする現代青年へ

の一箴とさせたり。

解釋

【武林唯七】 名は隆重、唯七は通稱。赤穂四十七義士の一人。討入の夜、敵吉色義央の首をあげた人。寛文十一年生、元祿十六年死を賜ふ。年三十三。

【今日殿様御身のはて】 元祿十四年三月十日赤穂城主浅野長矩、田村建顯の邸に幽せられ、その夜切腹を仰付けられた。

【とほうを失ふ】 途方を失ふ。途方は(一)方向、方針。(二)手段、すべ。(三)すぢみち。ことわり。廣辭

【あきらめ申すところ】 あきらめは致しませぬものゝ。冥途の御ともして(八五頁二行目)

云々にかゝる。

【冥途の御たび】 途土は亡者の魂の行くといふ所。よみち。(黄泉)。——のたびは(一)死出の旅、よみちの旅。(二)人生の終には死すべきものなるより、生涯の行路を旅にたとへいふ。(門松や——の二里塚)。こゝは(一)の意。

【死出の山】 死にて行く冥土にありて、獄卒羅刹等の來りさいなむといふ險しき山。(——ふもとを見てぞかへりにし。廣辭)

【伽】 トギ (一)相手となりて機嫌をとり徒然をなぐさむること。又そのつとめの人。

(二)看護すること。又、看護人。(三)寝所にはんべること。又其つとめ人。○こゝでは(一)の意。

【御遺恨ふくまれし云々】吉良義央に對して深く遺恨に思つてゐられる。

【なほさら御手前に限りて云々】御手前は室町時代以後に行はれし對稱の代名詞。あなた。きみ。足下。○。自分が死ねば、特にお前に限つては、母の爲めにも(君の爲は

鑑賞

亡き君を思ひ、子を思ふ至情、言々句々に溢れてゐる。殊に王陵の母の例にならひて双にふし、其の子の忠義を激ますといふその壯烈さ、世の白面男子を愧死せしむ。

いかにしても馴れさせ給はぬ冥途の御たび、ただ一人にてなにほどか御たよりなく……せめて冥途の御ともして、はなしの御となり参らせ候はんと思ひつめ……。しかも一人そなたを捨てしことに

勿論)仇であると思つて、敵に對して殊更に復讐に力が入るであらうと推量いたして。

【王陵の母】漢の高祖の臣、項羽はその母を捕へて陵を味方に招かうとしたが陵の母は自らして子の忠を勵ました。

原本には「唐の王陵、元直の母」とある。元直は劉備に仕へた徐庶が字、曹操その母を質として徐庶を招きしに母は却つて元直を叱して自殺した。

はなく……このところ篤と覺悟ありて……たとひ御手前一人なりとも、心をつくし申さるべく候。その懇切さを見よ。

参考

【赤穂義士復讐】元祿十四年三月勅使江戸に至る、江戸幕府淺野長矩及び伊達宗春をして接待せしむ。長矩禮に嫺はざるを以て辭す、許さず高家吉良義央と共に謀らしむ。然れども義央は自ら高ぶるを嘲り衆中に於て辱かしむ。長矩憤り刀を抜きて義央の額を傷つく、梶川與惣兵衛傍より之を抱き留む。幕府長矩を田村右京大夫に預けて死を賜ひ、其城邑を没す。老中土屋政直諫て曰く長矩を誅して義央を宥さば他日必ず變あらんと。聽かず、義央は病と稱して職を辭するのみ。時に赤穂には國老大石良雄等群臣三百人を城中に會して曰く、主辱めらるれば臣死すと、吾輩當に死すべしと雖も先君の弟大學(長廣)君あり、立て嗣となし祠を奉すべし、此事吾等生命を賭して幕府に請ひ、若し許されずば城を枕にして死なんと、老臣大野知房曰く、是れ上を要するもの、不可なりとて互に議論決せず。良雄乃ち奥野將監、原元辰等と議し遂に多川九郎左衛門、月岡治右衛門を江戸に遣はして繼嗣の事を請はしめ、一方には衆を會して守城を議す。會する者五十五人、良雄衆心離散して事の成らざる

を知り、幕使の來るを待ち自ら陳じ然る後國に殉ぜんとす。衆遂に血を刺して盟誓す。四月使江戸に至り良雄等の意を陳情す、當局その不可を説き諭して城を退かしむ。是に於て良雄等同志と復讐の議を定め、城を輪し衆を解きて京都山科に隠れ迹をくらまして苦辛敵を伺ふ。十五年十二月十四日、義央客を招き宴を張る。此夜良雄等同盟の士四十六人堀部金丸の宅に會し各章服をつけ、弓槍を擔ひ、長梯大槌を持ち、小笛を以て號となす。又約して事成らずば火を放ちて自刃せんと。衆を二に分て吉良氏の邸を襲ふ。終に義央を得て、其首を斬り、泉岳寺に詣り、長矩の墓を祭る。良雄豫め連名書二通を作り、一を義央の外廳に止め、一を大目付仙石久尙に送り、罪を請はしむ。幕府直に四十六士を細川、松平、毛利、水野の諸家に預け翌年二月二日良雄以下に死を賜ふ。泉岳寺内舊主長矩の墓側に葬る。〔國史〕

日の恩やたちまち碎く厚氷

大高源吾

二二 母に上る

作者

【佐久間象山】 サクマシヤウザン。幼字啓之助、名は啓、字は子明、修理と稱す象山の麓に生れしを以てその號とす。文化八年二月十一日信濃國松代の城下に生る。弱冠にして漢籍砲術を學び殊に算數の學に長ず。佐藤一齋の門に學び梁川星巖、藤田東湖等と相往來して時事を論じ漸く海防の論議盛なるや開港貿易を主張し傍ら西洋の砲術兵學を研究して之を門人に教授す、吉田松陰、勝安房の如きはその高弟である。安政元年米艦浦賀に來りし時、門人吉田松陰密に之に投じて海外に航せんとし成らずして縛につくや象山も亦連累して獄につながる。後蟄居を免ぜられて公武合體説を唱へ之が實行を圖らんとせしが、深く攘夷黨の憎む所となり元治元年七月十日洋鞍の白馬に跨り、建議の物を懷にして山階宮に至らんとするの途上三條木屋町に於て浪士の爲に斬らる。時に年五十四、京都妙心寺に葬る。〔國史〕

出 所

【象山全集】 上下二冊。信濃教育會編纂。大正二年九月、東京尙文館發行。

要 旨

本課は象山をして達眼を開かしめるに至つたその轉機の最大なる場合に於ける手簡である。幕末、外船の我邊境をうかがふ者漸く多く海防の論議者の間に起るや、象山夙に蘭學者の説を聞き、その精緻巧妙なるに注目し、盛に砲術を研究して海防の設備をなしてゐた。時恰も米艦浦賀に來るの報あり、象山は一日も早くその狀況を觀んものと急ぎ浦賀に達して始めて外船に接したる時、その豫想以上に發達せる外船に對しての驚異と、傍若無人なるその行動に對する憤懣の情、即ち憂國の心と達眼の言がその中に歷々たると共に、一方この人にして、誠に掬すべき孝心が溢れてゐる事とを生徒に知らしめたい。象山が開港貿易の己むを得ざるを悟り將來の國策を建言したのも、その動因は既に此の時に萌してゐたのである。前課と聯關して幕末の寮圍氣に觸れしめたい。

段 落

- 一、日々暑き事に……御安心願上候(十一頁三行目)
前書き、並に浦賀安着のこと。

- 二、いま早く起き……御座候様見え申候(十二頁十二行目)
所謂黒船を始めて見た時の驚異の模様。
- 三、とても……遺憾此上なきことに御座候。(十三頁十二行目)
彼の傍若無人なる振舞に對する憤懣と、我の無力無策なるを見てのもどかしさ。
- 四、一昨日……土地の者も申居候(十四頁五行目)
この度は先づ無事なるべきこと。
- 五、私もまた……終まで
視察の結果報告について。

解 釋

- 【あまり〜】「あまり」は、元來は、「程を過ぎて」「法外に」などの意を表はす副詞だが、こゝでは「極々」「至極」などの意。
- 【四つ時】今の十時に當る。
時のかぞへ方について昔は子夜(夜十二時)

二三 母に上る

を九つと立て(午前一時を九つ半)二時を八つといふ風に正午までを大體六分して七つ・六つ・五つ・四つと逆算し、又正午より子夜までを六分して前と同じく逆算す。此法は日出日没を基として明六つ・暮六つと定むるが故

二一一

に、晝夜の長短に従ひて一時の長さ同じからず、又之れに十二支を配當して眞夜中を子と定め丑寅卯と數へて午に至れば眞晝となり、以下順次亥の刻に至る。(辭林)

【浦賀】 神奈川縣相模國三浦郡の首邑。三浦半島の東岸、横須賀の南約二里、海港に臨む。人口約一萬七千。造船所がある。徳川幕府ここに奉行をおきて江戸入津の船舶を監視した。嘉永六年米艦來りて互市を請うたのはこの地で、明治三十四年建立せる米國提督ペルリ上陸記念碑はその西南久里濱にある。

【蒸氣船】 略して汽船といふ。蒸氣力を以て機關を動かし車軸を廻轉し、その媒介にて暗車又は外車を廻轉して航行する船。その最初は一八〇一年、英のフォース、アンド、クライド運河に使用せる外車汽船シャロット、ダングス號である。また一八四三年、大西洋を航行せるグレート、ブリテン號も暗車汽船

の嚆矢とする。

【火の力】 蒸氣の力。

【松輪】 マツワ。松輪崎。三浦半島南頭の極東部で浦賀水道の西側にある。

【帆影】 ハンエイ。ほかけ。船の姿。こゝに影といふのは姿の意。

【沙汰】 世間の噂。評判。

【コルベット】 Corvette 帆走の軍艦で、軍艦として下級のもの。

【艦】 船艦と熟する字。郭璞の江賦に、「船艦相屬」その註に、「船ハ舟尾ナリ、艦ハ船頭ナリ。艦はヘサキ。船はトモ。但し今は艦をトモ、船をヘサキと用ひた場合もある。

【大いに見侮り候うて】 米艦が日本を輕蔑

せるをいふ。

【剩へ】 アマツサへ。「あまりさへ」の音便。餘力に添はりて。その上。あまりさへ。あまさへ。加之。

【燈明臺】 又燈臺ともいふ。大海を航行する船舶に陸地の遠近と所在とを知らしめ、又は危険の箇所を測知させる。

【悠々】 ゆる〜。

【傍若無人】 バウジヤクブジン。傍に人なきが如しとの意より、人前をも憚らず氣儘に振舞ふこと。眼中人なき意。晉書載記「王猛詣桓温而談當世事捫蝨而言、旁若無人。」

【熟語】

【奉行】 ブギヤウ。上長の命を奉じて共事を

行ふの意。武家時代の職名。鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府等夫々その時代によりて種類名稱を異にす。こゝでは浦賀奉行のこと。

【圖史】

【與力】 ヨリキ。力を併せて加勢する意の詞より轉じて加勢する人を指し、更に室町時代の中葉以後は、諸大名等に隸屬せる士の稱となりて、被管と同義に用ひらるゝに至れり、而して安土桃山時代には附庸の大名をも凡て與力と呼びたり。なほ此の時より侍大將、足輕大將等に附屬せる騎士の稱となりしが、江戸時代にも之と同じく、幕府にては重なる職員には必ず之を隸屬し、上官を輔けて庶務を行はしめたり、人數役祿は組によりて同じか

らず、並にその班、同心の上であり、其隸屬せる職名等は、掌中大概順に見えれば參看すべし【圖史】

【同心】 ドウシン。武家の輕卒をいふ。鎌倉時代には字義の如く一味同心の意に用ひたりしが、元龜天正の頃に及びて、輕輩の武士を稱することゝなりたり。江戸幕府にてもまた此稱を襲ひたれども、皆諸奉行等に配屬せしめて大小の庶務を取らしめき。其中町奉行に屬するものは町方同心と唱へ、市内の警察事務に當り、今の巡查の類にて頗る市民に畏れられたり。同心頭ありて之を率ゆ。詳しくは掌中大概順參照。【圖史】

【上の御趣意】 徳川幕府のお考へ。

【公邊の御挨拶】

公邊は「公儀」に同じく

(一) 朝廷又は政府。(二) 僭して將軍家の稱(因)挨拶は米糴に對するとかくの挨拶。こたへ。應對。

【盆前】

ボンマへ。盆は孟蘭盆(Ullambana)

倒懸と譯す)の略。陰曆七月十五日に行ふ佛事、食器にいろ／＼の食物を盛りて、十方の佛僧に施し、以て七世及現世の父母の倒懸の苦を救はんとなり。精靈祭。たままつり。

(辭林)此の書を認めしは六月五日なり。

【罷り】

マカリ。目離るの義。(一)退き去る

の敬讓語。(二)往來すの敬讓語。(三)死去す。(辭林)こゝでは(一)の義。

【心得】

つもり。豫定。

【穿鑿】

センサク。兩方共にうがちほる義。

それより詳しく物事を取調ぶること、吟味すること。論衡「穿鑿之過」。

【御屋敷】

こゝは藩邸を指し、やがて松代藩主を指す。即ち眞田幸教である。この前年、

即ち嘉永五年前藩主幸貫卒し、孫、幸教嗣ぐ。當時藩主は江戸に在り、象山亦前々年來、母を奉じて江戸に在つた。さればこの手紙は江戸表へ遣したものである。

【附人】

ツキピト。從者。

【めでたくかしこ】

婦人の手紙の末文に添

ふる語。「かしこ」は、かしこし(長し)の意。かたじけない。もつたいない。男子の書狀の謹言頓首などに相當する。轉じて「かしこ」

鑑

賞

ともいふ。

始めて黒船を見た時の驚異の状と、無力なる我が當局の腑甲斐無さを憤慨する象山の心持と、掬すべき孝心とが如何にも如實に認められてゐる。達意を旨とする書翰文の上乗なるものと思ふ。然かもその卓見の識と併せて所々に憂國の士としての激越なる熱情のほとばしりを見る。

然るを奉行はじめ、怖れられ候か、それが上の御趣意に候か、たれ一人咎め候者もなく、唯見ぬふりをして置き候との事。さて、遺憾此上なき事に御座候。(二三頁)

の如きはその最高潮に達してゐる。

用語の平易なことも、亦象山の母に對する用意の現れと思はれる。

漫	述	佐久間象山
謗者任汝謗	嗤者任汝嗤	
天公本知我	不覺他人知	

二三 浮島原の對面

出 所

【義經記】 八冊、時代語を交へたる素朴の筆を以て源義經の生涯を叙せるもの。曾我物語と共に一種の語りものであつたらう。作者未詳。鎌倉の末より室町の初頃までの作か。

本課は、義經記卷第四、「頼朝・義經に對面の事」の條にある。この對面は、沼津附近と見てよ。時は治承四年十月。頼朝三十四歳。義經二十二歳。岡本綺堂氏の(春陽堂發行)戯曲集「朝飯前」を参照ありたい。

要 旨

源頼朝、平氏を討たんとして浮島原に陣せし時、義經奥州より來りて久方振に對面す。頼朝大いに喜び、父義朝の蘇生したるが如しといひ、義經も亦懐しげに頼朝を見上げて互に嬉し涙を流せし世にも美しき兄弟の愛情を思はしめ、前課と聯關して情操陶冶に資し且つ戦記文の一斑を知らしめたい。

二三 浮島原の對面

段落

- 一、佐殿は……聲を飲みて泣き給ふ。(一六五頁八行目) 頼朝、義經對面せしこと。
- 二、互に心のゆくほど……涙を流し給ひけり。(一六八頁二行) 頼朝の述懐
- 三、御曹司は……皆袖をぞぬらしける。(一六八頁四行目) その座の光景。
- 四、暫くありて……終まで。 義經の述懐並に覺悟。

解 釋

【佐殿】 スケドノ。兵衛佐殿の略、源頼朝をいふ。平治元年十二月十四日、頼朝十三にして右兵衛權佐になさる。同月廿八日解官。翌永曆元年三月伊豆國に配流、壽永二年十月本

官に復せらる。
【善惡に騒がぬ人】 沈重にして善惡共に事に騒がぬ人。

【見參】 ゲンザン。時代語で、面會又は拜謁

などの敬語。(辭林)

【やがて】 (一)とりもなほさず、すなはち(即) (二)ほどなく、すぐに。こゝでは(二)の意。

【御曹子】 オンザウシ。(一)堂上諸家中の子息をいふ、部屋住の若者の事。貞丈雜記「未だ家督にならぬ部屋住の人をいふ。曹子とはもと役人の用部屋の一構づつしきりてあるをいふ。部屋住の人も座敷を一かまへしきりて居住する心にて御曹子といふなり」(二)後世源氏嫡流のへやすみの子供の稱。こゝでは義經をさしていつた。

【頭の殿】 カウのトノ。源義朝のこと。左馬の頭であつたからいふ。カウはカミの音便。

【池の尼の宥められし云々】 池の尼は頭註の通り、池の禪尼といふ。平治の亂に、源頼朝の捕へられし時、その幼なるを憐み、助命を清盛に乞ひ、頼朝爲に免さる。

【八箇國】 關東八ヶ國。相模、武藏、安房、上総、下総、常陸、上野、下野をいふ。

【御邊】 ゴヘン。同輩に用ふる對稱の代名詞。そこもと、貴殿。

【八幡殿の後三年の合戦に云々】 後三年の役義家の軍利あらず、時にその弟新羅三郎義光は左兵衛尉となり京都に宿衛せしが、これを聞き赴き援けむことを朝廷に請ひて許されず、乃ち官を捨て、行き兄を援けて遂に家衛を滅した。

【後三年の役】 清原氏は前九年の功によつて安倍氏の地を領して勢が甚だ盛んであつたが白河天皇の御代に武則の孫眞衡の代になつて一族の間に争が起り、陸奥出羽が再び亂れた。義家は陸奥守となつて任地に赴き（一七四三）眞衡を助けてその異母弟の家衡と義弟の藤原清衡とを攻めたが、後に清衡は義經に屬し、家衡の叔父の武衡は家衡に黨し、また義家の弟の義光も來援したので義家等は遂に金澤柵を陥れて家衡と武衡とを殺して亂は平いだ（一七四四）。この戦役を後三年の役といふ。

【刑部丞】 ギヤウブノジョウ。刑部省の第三等官。

【魚と水との如く】 交の極めて親密なるをいふ。蜀志諸葛亮傳「先主曰、孤之有孔明、猶魚之有水。」

【大名小名】 大名とは王朝時代には名田（自ら開墾し又は購ひて、自己の名を附したる所有地）を多く領有したる者をいひ、武家時代には多大の地を領有せる武士（江戸時代には幕府に直隸せる萬石以上の土地を領したるもの）の通稱とし、これに對して小名の名あり。制度に於ける稱呼にはあらず。又大名小名を總稱して大名ともいふ。

【山科】 義經記卷一に「牛若は四つの年まで母の許にありけるが、清盛常に心にかけて宜ひけるは、敵の子を一所に育て、は遂には如

何あるべきと思召しければ、京より東、山科といふ所に源氏相傳の侍の遁世してかすかなる住ひしてありける所に、七歳半まで育て給ひけり。」

【平家方便をつくる】 種々のてだてを設けて失はんと計る義。方便は佛語、如來下根の衆生を度せむが爲に巧に諸法を用ひしをいふ。浄名經疏に「方便是權智。」

鑑

賞

故父左馬頭義朝を中心とした兄弟二人の久闊を述ぶるその言々、誠に眞情の掬すべきものがある。冒頭、冷靜沈勇淵潭の如き頼朝にして感涙にむせぶあたりより既に劇的シーンは濃厚なる色調を以て彩られてゐる。此の主人公頼朝は後に腰越に義經を峻拒したその主人公と同一人なることを冥想沈思させられたい。

判官晶風（抄）

國民の義經愛好熱が往昔より今日まで終始變らなないのは、彼の性格と境遇と行動とより觀て、華やかな半面と悲壯な半面とを併せ、豪快放膽な一面と風雅温情の一面とを兼ね、純にして直、血と涙と、力と才とを具備した所謂花も實もある理想的典型的武人であり、しかもそれが正しからざる強者に壓服せられる不合理は、實にして義ある者に共鳴し、正しくして弱き者に同情感奮せざんば止まざる、我が建國以來の任俠武勇の精神を昂揚せしめ來るが故である。

——島津久基「日本文學聯講」——

二四 安井夫人

作者

【森鷗外】名は林太郎、諱は高湛、源姓、鷗外漁史はその號、別に觀潮樓主人、千朶山房主人、歸休庵と號す。石見國津和野藩主龜井家の臣で、家代々醫を業とし、祖父の頃まで多く藩の典醫に任ぜられた。林太郎は文久二年正月十九日生れ、幼時は國で漢學と蘭學とを受け、明治五月十一歳の時上京して獨逸語を修め、六年東京醫學校に入り、十四年卒業して醫學士となり、その冬陸軍に出仕し、十七年衛生學研究のため獨逸國留學を命ぜられ、ライプチヒ、ミュンヘン、柏林の大學に學び、二十一年九月歸朝した。その間専門醫學の外に、文學・哲學・美術・戯曲等に就ても深い研究を積み、歸朝後は軍醫學校及び陸軍大學校の教官として衛生學を講じ、兵士の食物と日本の家屋に關する實驗に従ひ、傍ら東京美術學校・慶應義塾に於て美術解剖學・審美學を講じ、又小説「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」等を發表し、或は「衛生新誌」「醫事新論」等を創刊しては醫學上の意見を吐露し、「し

がらみ草紙」を發刊しては文學評論及び歐洲文藝の翻譯紹介に力めた。二十四年醫學博士となり、日清戰役より臺灣の征討に従ひ、軍醫學校長、近衛師團軍醫部長を経て、豊前國小倉の第十二師團軍醫部長に轉じ、居ること四年第一師團軍醫部長に轉じて東京に歸つた。

日露戰役には第二軍醫部長として出征し、金州から奉天まで大小の戰鬪に参加し、凱旋後、軍醫學校長事務取扱から、四十年遂に陸軍軍醫總監に進み、醫務局長に補せられた。小倉赴任以來久しく文壇を遠ざかつたが、これより以後創作に、翻譯に、評論に捲土重來の勢を以て活躍を開始し、次で文學博士の學位を受け、文藝委員會審査委員となり、又毎年、文部省美術展覽會審査員を囑託せられ、大正三年以後は専ら歴史傳記の方面に筆を執り、無聞の人物を闡明するに努めた。五年醫務局長を辭して豫備に入り、翌年帝室博物館總長兼圖書頭に任ぜられ、帝國美術院長、臨時國語調査會長等を兼ね、十一年七月九日六十一歳で薨去するまで、我が邦文化のため努力した。(森潤三郎)

年譜

明治七年(十三歳)東京醫學校豫科に入学。十年(十六歳)東京大學醫學部と改稱せらるゝと共に本科生となる。十四年(二十歳)七月四日卒業。九月十七日「讀賣新聞」に「河津金泉君に質す」を出す。知友の談によれば、新聞に初出の文なりといふ。十二月十六日任陸軍軍醫副、東京陸軍病院課僚被仰

二四 安井夫人

二二三

付、十七年(二十三歳)三月ブラーゲルの「陸軍衛生制度を基礎として、醫政全書稿本」十二巻を編し、この日之を官に納む。六月七日獨逸國留學被仰付。八月二十三日出發。十月十二日伯林着、ライプチヒ大學に入る。……二十年(二十七歳)九月八日東京に着す。二十二年(二十八歳)八月「國民の友」に「於母影」を發表す。十月二十五日、雜誌「しがらみ草紙」を創刊す。この年獨逸文學雜誌「東漸」に「決闘論」を掲ぐ。二十三年(二十九歳)一月「國民の友」に創作「舞姫」を出す、伯林を説話の地とす、後の「うたかたの記」、「文つかひ」と共に留學中の記念なり。八月「柵草紙」に「うたかたの記」を出す。ミュンヘンを説話の地とす。この年「ふた夜」、「惡因縁」、「うきよの波」、「埋木」等を譯出す。二十四年(三十歳)一月「新著百種」に「文つかひ」を出す。ドレスデンを説話の地とす。八月二十四日醫學博士を授けらる。二十五年(三十一歳)七月「水沫集」を春陽堂より出版。十一月「柵草紙」に「即興詩人」を譯載す。三十四年二月、九星霜を以て完結す。二十九年(三十五歳)一月雜誌「めざまし草」を創刊す。十二月論文及び雜錄に三木竹二の劇評を附したる「月草」を春陽堂より出版す。三十年(三十六歳)五月翻譯及び隨筆に小金井喜美子の作品を添へて「かげぐさ」と題し春陽堂より出版。三十五年(四十一歳)六月二十五日上田敏博士の「藝苑」と合同して雜誌「藝文」を創刊す。八月第二號刊行後出版書肆と衝突し、十月同人資を捐て、「萬年草」を創

刊す。九月「即興詩人」を春陽堂より出版す。三十七年(四十三歳)二月「萬年草」を廢刊す。三月「歌舞伎」臨時號に脚本「日蓮上人辻説法」を發表す。(後「我一幕物」に收む)四十年(四十六歳)九月春陽堂より「歌日記」を出版す。四十一年(四十七歳)六月二十六日文部大臣の官邸に開會の臨時假名遣調査委員會に於て、陸軍を代表して現在の假名遣に對する意見を述べ。二十九日業陰會の名を以て編纂したる「能久親王事蹟」を春陽堂より出版す。九月二十六日教科用圖書調査委員會々員被仰付。四十二年(四十八歳)一月春陽堂より「阿育王事蹟」を出版す。六月翻譯脚本集「一幕物」を易風社より出版す。七月二十四日文學博士の學位を受く。四十三年(四十九歳)一月易風社より「續一幕物」を、春陽堂より翻譯集「黄金杯」を出版す。四月一日「中央公論」に脚本「生田川」を載す。(後に「我一幕物」に收む)七月新潮社より創作集「涓滴」を出版す。八月一日「三田文學」に「あそび」を掲ぐ。十月大倉書店より翻譯集「現代小品」を出版す。四十四年(五十歳)一月一日「中央公論」に「蛇」を掲ぐ。この月春陽堂より翻譯劇集「人の一生」、「飛行機」を、二月創作集「烟塵」を出版す。三月「三田文學」に「妄想」を掲ぐ。七月金尾文淵堂よりハウプトマンの戯曲を譯せし「寂しき人々」を出版す。八月「中央公論」に「心中」を掲ぐ。九月一日「スバル」に「雁」を掲げ始め、斷續して大正二年に至る。この月春陽堂より「かげぐさ」改訂版を出版す。十月「中央公論」に

「百物語」を後に創刊集「走馬燈」に收む。十二月金華堂よりイブセンの戯曲を譯せし「幽霊」を出版す。四十五年(大正元年(五十一歳))四月春陽堂より大村西崖と共著「希臘羅馬諸神傳」を出版す。七月靑山書店よりシュニツレルの翻譯「みれん」を出版す。八月靑山書店より創作集「我一幕物」を、九月「一幕物」正續篇を合冊して出版す。大正二年(五十二歳)文藝委員會委員として譯せし「フアウスト」第一部を富山房より出版す。二月現代社「近代脚本叢書」第一編として、シュニツレルの戯曲「戀愛三昧」を、靑山書店より創作「青年」を出版す。三月二十二日富山房より「フアウスト」第一部を、同月靑山書店より翻譯戯曲集「新一幕物」を出版す。五月實業之日本社より翻譯集「十人十話」を、六月靑山書店より創作史實小説集「意地」を、七月創作集「走馬燈」及び「分身」を、警醒社よりシエクスピアの「マクベス」を、十一月イブセンの戯曲「ノラ」を、富山房より「フアウスト」の別冊として「フアウスト考」と「ギョオテ傳」とを陸續出版す。大正三年(五十三歳)一月「中央公論」に「大鹽平八郎」を出す。元年十月の同誌に「興津彌五左衛門の遺書」を出せしより、二年一月の「阿部一族」四月の「佐橋甚五郎」等、徳川時代の史實に立脚せる小説を書き始めつ。四月靑山書店より創作集「かのやうに」を、五月鳳鳴社より創作「天保物語」を、現代社よりホフマンスタールの戯曲「謎」を、九月春陽堂より縮刷「即興詩人」を、十月鈴木三重吉「現代名作集」第二編とし

て創作「塙事件」を出版す。四年(五十四歳)一月雜誌「心の花」に「歴史其儘と歴史離れ」を出し、前年來の執筆の傾向に就て記す所あり。「中央公論」に「山椒太夫」を出す。同月國民文庫刊行會「泰西名著文庫」の一として翻譯集「諸國物語」を、二月至誠堂より「大正名著文庫」第十四編として評論及び隨筆集「妄人妄語」を出版す。五月、陛下より詩作を徴され、五言律を謹書して獻上す。同月靑山書店より創作「雁」を、九月詩歌集「沙羅の木」を、十月通一舎より「千朶山房叢書」として、翻譯戯曲「稻妻」を出版す。十二月千章館より創作集「塵泥」を出版す。五年(五十五歳)一月一日より八日まで「東京日日」「大阪毎日」に「相原品」を十三日より五月十七日まで「澁江抽齋」を掲ぐ。四月十二日豫備被仰付。五月十八日より六月二十四日まで前記兩新聞に「壽阿彌の手紙」、六月二十五日より「伊澤蘭軒」を續出す。八月十三日「水沫集」縮刷本を出す。六年(五十六歳)一月一日より七日まで「東京日日」「大阪毎日」に「都甲太兵衛」を掲ぐ。七月春陽堂より「涓滴」を「還魂錄」と改題し、「名家傑作集」第十二編として出版す。九月五日「伊澤蘭軒」完結し、六日より十八日まで「鈴木藤吉郎」を、十九日より十月十三日まで「細木香以」を、十月十四日より二十八日まで「小島寶素」を、三十日より「北條霞亭」を掲げ、十二月二十六日に至りて新聞と關係を絶つ、こはその前日二十五日任帝室博物館總長兼圖書頭の辭令を受けたるを以てなり。十一月富山房より「フア

ウスト」の縮刷本を出版す。十年（五十七歳）二月帝國文學に「北條霞亭」の續稿を載す。春陽堂より創作集「高潮舟」を出版す。九月堀越秀像銘を作る。八年（五十八歳）五月寶文社「三田文選」の別冊として翻譯集「蛙」を出版す。十二月春陽堂より新聞所載創作集「山房札記」を出版す。九年（五十九歳）二月「帝國文學」廢刊し、「北條霞亭」再び中絶す。十月雜誌「アララギ」に續稿「霞亭生涯の末一年」を載せ、十年十一月を以て完結す。金鈴社より「天保物語」を出版す。十年（六十歳）一月雜誌「明星」創刊され、「古い手帳より」と掲げ始む。三月圖書寮に於て撰述せし「帝室考」成り、百部を印刷配布す。次で「元號考」の著述に従ひしも完成に至らざりき。六月二十五日臨時國語調査會會長被仰付。七月善文社「脚本名著選集」第一編として、ストリンドベルヒの戯曲「ベリカン」を出版す。十月春陽堂より「森林太郎譯文集」卷一として「獨逸新戯曲篇」を出版す。十一月一日「霞亭生涯の末一年」完結す。この頃より時々下肢に浮腫あり、營養も幾分衰へ、腎臓病の徴を現はす。十一年（六十一歳）六月に至り病大に進み、二十日臥床、二十八日額田醫學博士の診察によりて萎縮腎と確定、七月七日、兩陛下より葡萄酒下賜、八日攝政宮殿下より御見舞品下賜、この日特旨を以て位一級被進叙從二位。九日午前七時薨去。（現代日本文學全集、森鷗外集——森潤三郎）

永井荷風氏曰く、

千代山房晩年の諸作を總稱して歴史小説或は歴史物となすは固より可なるべし。然れども從來世人の稗史小説と稱し來れるものとは全くその選を異にす。先生の所謂歴史物は實に先生獨創の文學にして、我が文學史上曾てその類例を見ざるものなり。……山房の小説體史傳は、正史の威嚴と、隨筆の興趣と、稗史講談の妙味とを併せ有して、その間更にまた著者平生の卓見高潔を窺ひ知らしむ。修史を尙ぶものは、山房文學の考證該博精緻なるを見て、自ら敬意を表すべく、野乘の興を娛しまんとするものは、記事の絶妙なるを見て讚賞の辭を求むるに苦しむべし。……往年著者が毎夕寄席に赴きて聴きたりし講談と、攻學の餘暇愛讀したりし古老の隨筆とは偶然著者が晩年に至つて自家獨得の新文學を大成せしむる遠因となりしなり。藝術製作の興會は凡て偶然に發するものなり。偶然に發したる興會を捉へて散逸せしめず、能く製作の功を收めしむるものは、蓋しその人平生の蘊蓄と製作に對する熱誠との二者に他ならず。……わが近時の文壇、西歐十九世紀末の文學を仰いで宗となし、より、許すに名篇佳什を以てするもの、戀愛を説くにあらざれば憂傷病衰の狀を描くに止り、悽愴凜烈の氣概を寫すもの全くその跡を斷つに至れり。先生晩年の歴史小説には、正に群芳妍を競ふの間孤松の亭亭たるを仰ぐ思あるものなり。（麻布襟記）

鷗外氏の文章は和文脈・漢文脈・洋文脈を完全に具備して、それが實に痕跡を止めぬばかりに巧に

作られてあつた。(田山花袋——明治小説内容變遷史)

高踏的な藝術を森鷗外氏に見る——莊重で純正な筆致は、その文に於て最も香り高く見得られる。漢文國文の精と、羅典文の粹とを抜き來つて、初め茲に格調謹嚴、毫も粉飾の厭ふべきもなく、理路整然、簡淨蒼古の色を帯びた文が生れたのである。緊張した文からどことなく餘韻が清く澄み輝き、高潔な、淡いけれども暗示的な感情が心に觸れる。亦得難い文品である。それは丁度西洋古代の彫刻の名作に對するやうな思ひがする。(傑作鈔——明治より大正へ)

以上で見る如く、氏の筆の依つては毎に複雑した史實や深刻な心理も冷靜明快水の如き味はひのうちに、しかも精神の強調をその底に漲らせて表現されてをり、すべて人生の高貴な情操を精透な筆致ににじませてゐる感がある。

出 所

【鷗外全集】「安井夫人」と題する息軒の夫人を主題とした短篇小説。「安井夫人」は、大正三年四月雑誌「太陽」に發表され、同年十月單行本現代名作集第二編「堺事件」の中に收められ、鷗外全集には第四卷に載せてある。

要 旨

大偶息軒先生の少年學習時代の面目を偲ばせて生徒各自の日常生活を反省せしめる資とするは勿論であるが、本課の主眼はそれよりも寧ろ「岡の小町」と呼ばれた美人お佐代が、十六歳といふ娘盛り、「猿」と渾名された程の不男で、しかも三十歳にもなる隻眼の男を自ら進んで夫として選んだ。そして彼の女は美しい肌を粗服を纏つて、極端に質素な生活をして、一意専心學問に勵んだ夫に仕へて、あらゆる勞苦を辭せずして、一生を全く夫と子とに捧げ盡して、それで自己満足を得て瞑目したといふ、その神々しい生涯から考へて見ると彼の女は現實世界を超越し、未來の靈の世界に光明を認めて、それに向つて只管に精進したものゝやうに思はれる點を十二分に味はせたいのである。

段 落

一、仲平さんは……言蔭をいはずには置かぬからである。(一一九頁の六行目まで)

少年學習時代の面目を叙してあるが、全篇から見れば仲平の結婚談の伏線になつてをる。

1、仲平さんは……田畑へ往反しようとはしなかつた。(一一六頁の終りまで)
郷里に於ける仲平を描いた。

2、仲平に先だつて……蔭言をいはずには置かぬからである。(一一九頁の六行目まで)
大阪・江戸への前後遊學、成業して歸國するまで。

一、滄洲翁は……(終りまで)

結婚問題より彼の女の死に至るまで。

2、滄洲翁はその邊に一層心を用ひなくてはならない。(一二二頁の終りまで)

妻帯させるに就いての親心。

3、茲に仲平の姉で……只の怪訝であつた。(一二三頁の三行目まで)

彼の女が自ら進んで仲平を夫として選ぶに至るまで。

4、婚禮は……全く趣を殊にしてゐたのである。(一二三頁の終りまで)

結婚後の彼の女について。

5、仲平が天平の……(終りまで)

内助の功を稱へて彼の女の死を述べて結んだ。

解 釋

【仲平】 江戸幕末の儒者。名は衝、仲平と稱す。息軒はその號。日向國清武郷の人なり。狀貌短小、痘痕面に滿つ。然れども威容あ

り。發憤して學に志し、讀書に勉む。大阪に赴きて篠崎小竹に従ひ、江戸に出でて昌平覺に入り、又松崎懺堂に就きて經を質す。天保

元年飢肥侯の藩學を創設するや、徴されて助教となる。時に年三十二。命を受けて九州の風教を巡察し、觀風抄一卷を撰す。既にして侯の帷幄に參し、釐革するところあらんとして俗吏に阻まる。七年辭して東上し、再び昌平覺に入る。九年遂に家を江戸千駄ヶ谷に徙す。後、屢々火災に罹りて轉居す。諸生その門に集まる。弘化四年藩邸の政務に參し、嘉永五年用人に補せらる。翌年米艦來航し朝野騒然たる際、海防私議一卷を著す。水戸侯齊昭これを善とし、藤田東湖をして就て時務を詢はしむ。文久二年昌平覺教授に補せらる。蓋し異數なり。元治元年陸奥國白川の令に轉じ、未だ任に赴かずして免ぜらる。既に

二四 安井夫人

して致仕す。明治元年王師東下するに及び、避けて郊外に居る。彦根侯に聘せられ、尋いで飢肥侯世子の師となる。朝廷これを徴す。老病を以て辭す。九年九月二十六日東京土手三番町の寓に歿す、年七十八。駒込養源寺の塋に葬る。その經史を研鑽するや、漢唐の注疏に據り、參するに衆説を以てす。考證精核にして發明するところ多し。著に觀風抄・海防私議のほか、管子纂註十三卷・左傳輯釋二十一卷・論語集說六卷・息軒文集四卷あり。

百 科

【不男】 ブヲトコ。無男とも書く。顔のみにくき男子。(因圖)

【蔭言】 カゲゴト。かげぐちともいふ。當人

のゐない所でわるくいふこと。

【清武一郷】 キョタケイチゴウ。宮崎縣日向國宮崎郡赤江以南、加江田に至る村落を總稱して清武の郷といつた。今は、南清武・北清武の二村になつてゐる。息軒は、南清武の木原中野に生れた。

【仲平の父】 安井滄洲。名は朝完、字は子全、平右衛門と稱した。日向國飢肥藩に仕へた儒者で、天保六年に歿した、年六十九。古今體・遊記などの著がある。

【飢肥藩】 オビハン。その治城は飢肥町にあつた。町は南那珂郡の中央よりやゝ東北に偏して酒谷川に臨んでゐる。宮崎市を南に距ること十一里餘、都城を東に距ること十里。

へて、それを殘酷だと評した辭様上の技巧を見のがさぬやうに。さう言つておいて、實は偶然に父子揃つて偶然にも天然痘にかゝつた結果の殘酷さを意味してゐるのである。

【囁く】 サ、ヤク。

【見よ】 「見よ」といふよりも、何となくさげすんだ語氣がある。

【猿曳云々】 サルヒキ云々。猿曳は、猿をつれ藝をさせてあるくもの。さるまはし。こゝでは猿曳を兄につけた綽名。猿は弟。

【篠崎小竹】 シノザキセウチク。徳川時代の儒者。名は弼、字は承弼、小竹はその號である。豊後國の醫家加藤吉翁の子で天明元年大阪に生れた。篠崎三島に従つて學習し、遂に

【小作人】 コサクニン。小作とは他人の土地を小作料を拂ひて借り、耕作又は牧畜などすること。「小作人」とは、小作を業とするもの。小作の農夫。〔廣辭〕

【脊丈】 セタケ。身長。

【畑打】 ハタウチ。耕作。

【さゝやく】 聲をひそめて話す。耳語する。

〔廣辭〕

【痘瘡】 ハウサウ。もと印度地方に起り廣く世界に蔓延せし傳染病。天然痘のこと。〔廣辭〕
いもがさ。もがさ。いも。たとひ全治しても、顔面に病痕(あばた)が残る。

【痘痕】 アバタ。梵語、アフタの轉。

【偶然】 こゝでは「偶然」といふ言葉をとら

その養子となつた。時に年十三。數年の後江戸に出て尾藤二洲の門に入り、暫くして養母の計に遭遇して家に歸つた。やがて江戸の學政が一新して古賀精里がその木鐸であると聞き、ひそかに家を脱して東遊し、精里に従つて學んだ。時に年二十八。後大阪に歸り、養父に代つて教授した。教授する毎に諄々として經義を講じて倦まず、又詩を作るに甚だ感を刻せず、書は流麗にして穩健であつた。晩年腹痛を患へ、これを久しくして癒えず、遂に安政四年五月八日尼崎町の宅に歿す、年七十一。天満の天徳寺先塋の側に葬る。著述に小竹齋詩文集數十卷ある。〔百料〕

【金子】 キンス。「子」は物の名に添へて用ひ

助詞である。例へば「帽子」「亭子」「障子」「算子」などの「子」は皆これに同じい。

【大阪江戸堀】中之島の南方に位し、幕政の當時は大名諸侯の邸庫が多く堀の南北に散在し、俗に藏屋敷と稱してゐた。

【長屋】ナガヤ。一棟の内を幾つにも區劃し、一區劃毎に一戸づつ住居するやうに造つた長い家。

【自炊】ジスキ。自分で飯をかしくこと。

【仲平豆云々】この次に、原文では、「あれでは體が續くまい。」と氣遣つて、酒を飲むことを勧めると、仲平は素直に聴き納れて毎日一合づつ酒を買つた。そして晩になると、その一合入の徳利を紙拵で縛つて、行燈

の火の上に吊るして置く。そして燈火に向つて、笹崎の塾から借りて來た本をやるうちに、半夜人定つた頃、燈火で尻をあぶられた徳利の口から、蓬々として蒸氣が立ち昇つて來る。仲平は卷を釋いて、徳利の酒を旨さうに飲んで寝るのであつた。

【學殖】ガクシヨク。學問の素養があること。左傳の昭公八年の條に、「夫學殖也。不殖將落。」とあり、杜註に、「殖は生長なり。學の徳に進むことは、農の苗を殖うるに、日に新に月に益するが如くなるをいふ。」とある。

【訃音】フイン。フオン。死去の通知。因國

【古賀侗庵】コガトウアン。徳川幕府の儒

官。名は燈、字は季曄、通稱は山太郎、精里の第三子、世々佐賀藩に仕ふ。寛政八年父の幕府より徴さるゝや、侗庵これに従ひて江戸に出で、勉學の功成り、文化六年擢んでられて儒官となり、父子相並びて學政に與る。世人これを稱す。同十一年兩番となり、尋いで御儒者となる。著述に新論・文抄・筆記等數十種あり。弘化四年病を以て歿す、年六十。

【百科】

【昌平黌】シヤウヘイカウ。徳川幕府官設の學校。單に學問所とも、また昌平學校、昌平坂學問所ともいつた。江戸本郷湯島、即ち今の東京女子高等師範學校の地にあつた。初め

徳川家光が寛永七年に江戸忍ヶ岡を林羅山に與へ、興學の地としたのが創始で、元祿三年これを湯島坂上に移し、その地を名づけて昌平坂といひ、孔子の廟を立て、總稱して聖堂といつた。明治維新後、一旦閉鎖し、更に明治三年再び開放して昌平學校といつたが、後、大學校と改めた、これが東京帝國大學の前才である。詳しくは同書参照のこと。

【昌平黌に入つた】この次に、原文には、後世の註疏に據らずに經義を究めようとする仲平の爲には、古賀より松崎謙堂の方が懐しかつたが、昌平黌に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。

とあつて、「痘痕があつて……」につづいてゐる。

【半折】 ハンセツ。半切とも書く。唐紙・白紙・畫仙紙などの全紙を縦に二つ切にしたもの。天國

【今は音を忍が岡の云々】 「忍が岡」は、東京上野公園にある丘陵の名。寛永十年に、林道春がこの地に孔子の廟を建て、後元祿三年に湯島に移したのが昌平黌のもとである。

一首の意は、今は鳴かず飛ばず、何といはれても音も出さずに沈黙を守つて刻苦してゐる忍が岡の時鳥も、いつかは雲上高く名聲をあげて衆人の仰望を一身に受ける身とならうといふのである。

「時鳥」は子規・杜鵑・郭公・不如歸などとも書く。「雲井のよそ」は、非常にかけ離れてゐるのにいふ語。空。雲表。

【抱負】 ハウフ。心中に懐抱した志望、心中に懐く自信、かんがへ、計畫。天國

【傾注】 ケイチュウ。傾け注ぐこと。専ら心をその物事に注いで顧みないこと。天國

【揶揄】 ヤユ。侮りからかふこと。嘲弄すること。天國

【侍讀】 ジドク。君の側に侍つて書を講じ學問を授ける人。息軒が侍讀として仕へたのは子爵伊東祐弘の祖父伊東祐相であつた。

【五節供】 ゴセツク。五節句とも書く。徳川時代に於ける五つの式日。即ち人日（正月七

日）・上巳（三月三日）・端午（五月五日）・七夕

（七月七日）・重陽（九月九日）をいふ。この日それぞれの儀式あり。明治六年一月公にはこれを廢せられたれど、民俗なほこの風を守る所あり。百科

【年忌】 ネンキ。回忌に同じ。人の死亡の後、毎年めぐり来るその月、その日の稱。一年目を一回忌又は一周忌、三年目を三回忌又は三周忌といひ、それより七回忌・十三回忌・十七回忌・五十回忌・百回忌等あり。その日佛事供養をなす。天國

【華やか】 ハナやか。①はなばなしく。きらびやか。はでやか。美々しく。②きはだちて。きはきはしく。ぱつと。天國こゝは

(一)

【地味】 チミ。①飾りなきこと。花やかならざること。②はでの對③質樸。街氣なきこと。天國こゝは①

【生憎】 アヤニク。アイニクはアヤニクの訛り。①あゝ憎く。あなにく。②意地わるく。をりあしく。天國こゝは②

【従妹】 イトコと訓む。

【器量】 キリヤウ。①物の用に立つべき才徳・器量。②かほだち。みめ。容姿。天國こゝは①

【素直】 スナホと訓む。

【臆面】 オクメン。氣後れしたる顔面。臆したる面貌。天國

【窮した】 キウした。ゆきつまつた。

【外舅】 シウト。妻の父。〔天國〕

【外姑】 シウトメ。妻の母。〔天國〕

【卑屬】 ヒゾク。親族關係にて、自己の子の列以下にある親族。即ち、親等の下なる親族。その直系親なるを直系卑屬、傍系親なるを傍系卑屬といふ。(尊屬の對)家禮儀節に

「卑屬謂兄弟子孫。〔天國〕

【不調】 フテウ。とゝのはさること。〔天國〕

【御新造】 ゴシンザウ。人の妻の敬稱。こし

んぞ。〔天國〕

【内裏様】 ダイリサマ。天皇の御様に擬したる大形の雛人形。内裏雛。〔天國〕

【五人囃子】 ゴニンバヤシ。琴・三味線・太

鼓・鼓の五種の樂器を用ひて行ふ合奏。又、雛祭等にて、その形を模せる五箇の人形。

〔天國〕

【吉野紙】 ヨシノガミ。大和國吉野郡丹生郷より産する紙。楮より製し、極めて薄く漉きたるもの。漆漉し。やはら紙。やはら野紙。

〔天國〕

【緋桃】 ヒモモ。薔薇科、櫻屬の落葉喬木。

桃の一種。花の緋色なるもの。〔天國〕

【尉姥】 ジョウウバ。尉は老翁。姥は老いたる女。〔天國〕

【勝手】 カツテ。臺所。くりや。又その所に務むる人々。〔天國〕

【一釣瓶】 ヒトツルベと訓む。

【甲斐々々し】 カヒガヒシ。(一)かひあるさま。

(二)勢よき狀なり。はき／＼したるさまなり。いさまし。けなげなり。心地よきさまなり。〔天國〕こゝは(一)

【劈頭】 ヘキトウ。そもそものはじめ。まつさき。〔天國〕

【主題】 シュダイ。おもなる題目。主眼の題。〔天國〕

【道破】 ダウハ。いひやぶること。いひきること。いひはること。いひのけること。説破。論破。〔天國〕

【謔】 ウツと訓む。

【冷然】 レイゼン。(一)ひや／＼かなさまにいふ語。(二)冷淡なるさま。又、意氣の沮喪

し、不快なるさまにいふ語。(三)腹を立つるさまにいふ語。〔天國〕こゝは(一)

【直談判】 チキダンパン。直接にかけあふこと。と。

【頭末】 テンマツ。事の始より終りまでの狀。事のなりゆき。〔廣辭〕

【ギヤマン】 オランダ語 Diamant の訛。(一)金剛石。(二)ガラス。〔廣辭〕こゝは(一)

【コップ】 ボルトガル語 Copo。玻璃製の盃又は水飲。〔廣辭〕

【注いで】 ツいでと訓む。

【怪訝】 ケゲン。不思議さうなるさま。合點のゆかぬ容貌。いぶかしげ。〔天國〕

【地歩を占む】 自家の立場を占む。〔天國〕

【明教堂】 メイケウダウ。飢肥藩の藩校。

【祝筵】 シュクエン。祝ひの宴席。賀席。天國

【故舊】 コキウ。ふるなじみ。むかしからの

しりあひ。天國

賞

一、一體この文は、一通り讀むとその前半に於て、「仲平さんは不男だ」といふことのみを可なり力説したやうにも感ぜられる。冒頭にも終りの方にもその言葉があるので尙更さう思へる。それはその筈で、「安井夫人」といふ一篇の小説の構造とか脚色とかからいふと、仲平の隠忍苦學遂に名を成す事實と共に、その「不男」といふことを強く描いておく必要があるのである。安井夫人になつた「お佐代さん」は、「岡の小町」と綽名されたほどの美人であつて、容貌からいつては、到底この仲平とは不釣合であつたといふことを感じさせる爲である。しかし、その不男に對する人身攻撃的な無遠慮な嘲笑に對して仲平が克く隠忍したのみならず、江戸に出ては、反つて和歌を以てその燕雀類の嘲笑に一矢を酬いた痛快さを味はねばならぬ。その他耕作の傍ら讀書する事實では好學の念の篤きを感じ、兄と一緒に歩くのをつらく思ふ一條では、その人間味にゆかしさを覚え、「仲平豆」の

話では苦學のほど眞に同情の感禁する能はざる表現である。

二、仲の學問修業も一通り出來た、年も三十にならうといふ、——この時の親滄洲翁の心持がいかにも細に入り微を極めた表現である。

偶然にも自分と同じ不男である仲の爲に、自己の過去を辿つてかくまで心を悩ますのも無理はあ
るまい。こゝで特に氣をつけるべきは、

「若くて美しいと思はれた人も、暫く交際してゐて、智慧の足らぬのが暴露して見ると、その美貌は何時か忘れられてしまふ。又三十になり、四十になる。之とは反對に、顔貌には疵があつても、才人だと、交際してゐるうちに、その醜さが忘れられる。又年を取るに従つて、才氣が眉目をさへ美しくする。云々」

この考へは親の最眞目かも知れない、併し若い子女達の深く味ふべき言葉だと思ふ。

要するに「安井夫人」の全篇は、大儒息軒先生の夫人の生活とその性格とを主眼として描いた傳記體小説である。既に要旨の所でも述べた通り、彼の女は現實世界を超越し、未來の靈の世界に光明を認めてゐるのである。文の全體のすぐれたことに就いては、「作者欄に書き添へて置いた永井荷風氏の言で窺へることと思ふ。

三、作者は隨所に「寫法・引用法・問答法を用ひて表現を如實にした點とか呼應法とか、かゝる修辭上についても注意せねばならぬと思ふ。

参 考

一三二頁の省略せられた原文は、

翌年仲平が三十、お佐代さんが十七で、長女須磨子が生れた。中一年置いた年の七月には、藩の學校が飢肥に遷されることになつた。その次の年に、六十五になる滄洲翁は飢肥の振徳堂の總裁に聘せられて、三十三になる仲平がその下で助教を勤めた。清武の家は隣にゐた弓削と云ふ人が住まふことになつて、安井家は飢肥の加茂に代地を貰つた。

仲平は三十五の時、藩主の供をして再び江戸に出て、翌年歸つた。これがお佐代さんが稍長い留守に空閑を守つた始である。

滄洲翁は中風で、六十九の時亡くなつた。仲平が二度目に江戸から歸つた翌年である。

仲平は三十八の時三たび江戸に出て、二十五のお佐代さんが二度目の留守をした。翌年仲平は昌平齋の齋長になつた。次いで外櫻田の藩邸の方でも、仲平に大番所番頭と云ふ役を命じた。その次の年に、仲平は一旦歸國して、間もなく江戸へ移住することになつた。今度はいづれ江戸に居所が極まつ

たら、お佐代さんをも呼び迎へると云ふ約束をした。藩の役を罷めて、塾を開いて人に教へる決心をしてゐたのである。

この頃仲平の學殖は漸く世間に認められて、親友にも鹽谷宕陰のやうな立派な人が出來た。二人一しよに散歩をすると、男振はどちらも悪くても、兎に角背の高い鹽谷が立派なので、「鹽谷一丈雲横、腰、安井三尺草埋頭。」などと冷かされた。

江戸に出てゐても、質素な仲平は極端な簡易生活をしてゐた。師新參で、昌平齋の塾に入る前には、千駄谷にある藩の下邸にゐて、その後外櫻田の上邸にゐたり、増上寺境内の金地院にゐたりしたが、いつも自炊である。さていよいよ移住と決心して出てからも、一時は千駄谷にゐたが、下邸に火事があつてから、始めて五番町の賣居ウライを二十九枚で買つた。

お佐代さんと呼ばひ迎へたのは、五番町から上二番町の借家に引き越してゐた時である。所謂三計塾で、階下に三疊やら四疊半やらの間が二つ三つあつて、階上が斑竹山房の匾額を掛けた書齋である。

斑竹山房とは江戸へ移住する時、本國田野村字假屋の虎斑竹を根こじにして來たからの名である。仲平は今年四十一、お佐代さんは二十八である。長女須磨子に次いで、二女美保子、三女登梅子と、女の子ばかり三人出來たが假初の病のために美保子が早く亡くなつたので、お佐代さんは十一になる須

磨子と、五つになる登梅子とを連れて、三計塾にやつて来た。

仲平夫婦は當時女中一人も使つてゐない。お佐代さんが、飯炊をして、須磨子が買物に出る。須磨子の日向訛が商人に通ぜぬので、用が辨ぜずにごさご歸ることが多い。

お佐代さんは形振に構はず働いてゐる。それでも「岡の小町」と云はれた昔の佛はどこやらにある。

この頃黒木孫右衛門と云ふ男が仲平に逢ひに来た。もと飢肥外浦の漁師であつたが、物産學に精しいため、わざわざ召し出されて徒士になつたのである。お佐代さんが茶を酌んで出して置いて、勝手へ下がつたのを見て狡猾なやうな、滑稽なやうな顔をして、孫右衛門が仲平に尋ねた。

「先生。只今のは御新造でござりますか。」

「さやう。妻で。」恬然として仲平は答へた。

「はあ。御新造様は學問をなさりましたか。」

「いや。學問と云ふ程の事はしてをりませぬ。」

「して見ますと、御新造様の方が先生の學問以上の御見識でござりますな。」

「なぜ。」

「でもあれ程の美人でお出になつて、先生の夫人におなりなされた所を見ますと。」

仲平は覺えず失笑した。そして孫右衛門の無遠慮なやうな世辭を面白がつて得意の碁の相手をさせて歸した。

お佐代さんが國を出た年、仲平は小川町に移り翌年又牛込見附外の家を買つた。値段は僅十兩である。八疊の間に床の間と廻縁ととが付いてゐて、外に四疊半が一間、二疊が一間、それから板の間が少々ある。仲平は八疊の間に机を据ゑて、周圍に書物を山のやうに積んで讀んでゐる。この頃は靈岸島の鹿島屋清兵衛が藏書を借り出して來るのである。一體仲平は博渉家でありながら、藏書癖はない。質素で濫費をせぬから、生計に困る事はないが、十分に書物を買ふだけの金はない。書物は借りて覽て書き抜いては返してしまふ。大阪で篠崎の塾に通つたのも、篠崎に物を學ぶためではなくて、書物を借るためであつた。芝の金地院に下宿したのも、書庫をあさるためであつた。この年に三女登梅子が急病で死んで、四女歌子が生れた。

その次の年に藩主が奏者になられて、仲平に押合方と云ふ役を命ぜられたが、目が悪いと云つてこゝとわつた。薄暗い明りで本ばかり讀んでゐたので實際目が好くなかつたのである。

その又次の年に仲平は麻布長坂裏通に移つた。牛込から古家を持つて來て建てさせたのである。それへ引き越すとすぐに仲平は松島まで觀風旅行をした。淺葱織色木綿の打裂羽織に裁附袴で、腰に銀

拵の大小を挿し、菅笠を被り草鞋を穿くと云ふ支度である。旅から歸ると、三十一になるお佐代さんが始めて男子を生んだ。後に「岡の小町」そつくりの美男になつて、今文尙書二十九篇で天下を治めようと云つた才子の棟藏である。惜しいことには二十二になつた年の夏、暴瀉で亡くなつた。

中一年置いて、仲平夫婦は一時上邸の長屋に入つてゐて、番町袖振坂に轉居した。その冬お佐代さんが三十三で二人目の男謙助を生んだ。併し乳が少いので、それを雜司谷の名主方へ里子にやつた。謙助は生長してから父に似た異相の男になつたが、後日安東益齋と名のつて、東金、千葉の二箇所で醫業をして、旁漢學を教へてゐるうちに、持前の肝癥のために、千葉で自殺した。年は二十八であつた。墓は千葉町大日寺にある。

浦賀へ米艦が来て、天下の多事の秋となつたのは、仲平が四十八、お佐代さんが三十五の時である。大健息軒先生として天下に名を知られた仲平は、ともすれば時勢の旋渦中に巻き込まれようとしてわづかに免れてゐた。

飢肥藩では仲平を相談中といふ役にした。仲平は海防策を献じた。これは四十九の時である。五十四の時藤田東湖と交つて、水戸景山公に知られた。五十五の時ペルリが浦賀に來たために、攘夷封港論をした。この年藩政が氣に入らぬので辭職した。併し相談中をやめられて、用人格といふものになつた。

つただけで、勤向は前の通であつた。五十七の時蝦夷開拓論をした。六十三の時藩主に願つて隱居した。井伊閣老が櫻田見附で遭難せられ、景山公が亡くなられた年である。

家は五十一の時俣町に移り、翌年火災にあつて、焼残りの土蔵や建具を賣り拂つて番町に移り、五十九の時麴町善國寺谷に移つた。邊務を談ぜないと云ふ事を書いて二階に張り出したのは、番町にゐた時である。

お佐代さんは四十五の時に稍重い病氣をして直つたが、五十歳暮から又床に就いて、五十一になつた年の正月四日に亡くなつた。夫仲平が六十四になつた年である。跡には男子に、短い運命を持つた棟藏と謙助との二人、女子に、秋元家の用人の伴田中鐵之助に嫁して不縁になり、次いで鹽谷の媒介で、肥前國島原産の志士中村貞太郎、假名北有馬太郎に嫁した須磨子と、病身な四女歌子との二人が残つた。須磨子は後の夫に獄中で死なれてから、お糸、小太郎の二人の子をつれて安井家に歸つた。歌子は母が亡くなつてから七箇月目に、二十三歳で跡を追つて亡くなつた。

お佐代さんはどう云ふ女であつたか。美しい肌を纏つて、質素な仲平に仕へつゝ一生を終つた。飢肥吾田村字星倉から二里許の小布瀬に、同宗の安井林平と云ふ人があつて、その妻のお品さんが、お佐代さんの記念だと云つて、木綿縞の袷一枚持つてゐる。おそらくはお佐代さんはめつたに

絹物などは着なかつたのだらう。

お佐代さんは夫に仕へて勞苦を辭せなかつた。そしてその報酬には何物をも要求しなかつた。晋に服飾の粗に甘んじたばかりではない。立派な第宅に居りたいとも云はず、結構な調度を使ひたいとも云はず、旨い物を食べたがりも、面白い物を見たがりもしなかつた。

お佐代さんが奢侈を解せぬ程おろかであつたとは、誰も信ずることが出来ない。又物質的にも精神的にも、何をも希求せぬ程恬淡であつたとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんには慥かに尋常でない望あがつて、その前には一切の物が塵芥の如く卑しくなつてゐたのであらう。

お佐代さんは何を望んだか。世間の賢い人は夫の榮達を望んだのだと云つてしまふだらう。これを書くわたくしもそれを否定することは出来ない。併し若し商人が資本を卸し財利を謀るやうに、お佐代さんが勞苦と忍耐とを夫に提供して、まだ報酬を得ぬうちに亡くなつたのだと云ふなら、わたくしは不慙にしてそれに同意することが出来ない。

お佐代さんは必ずや未來に何物をか望んでゐただらう。そして瞑目するまで美しい目の視線は遠い所に注がれてゐて、或は自分の死を不幸だと感ずる餘裕をも有せなかつたのではあるまいか。その望の對象をば、或は何物ともしかと辨識してゐなかつたのではあるまいか。

お佐代さんが亡くなつてから六箇月目に仲平は六十四で江戸城に召された。又二箇月目に徳川將軍に謁見して、用人席にせられ、翌年兩番上席にせられた。仲平が直參になつたので、藩では謙助を召し出した。次いで謙助も昌平爰出役になつたので、藩の名跡は安政五年に中村が須磨子に生ませた長女絲に、高橋圭三郎といふ婚を取つて立てた。併し夫婦は早く亡くなつた。後に須磨子の生んだ小太郎が繼いだのはこの家である。仲平は六十六で陸奥塙六萬三千九百石の代官にせられたが、病氣を申し立て、赴任せずに、小普請入をした。

住ひは六十五の時下谷徒士町に移り、六十七の時一時藩の上邸に入つてゐて、麴町一丁目半藏門外の壕端の家を買つて移つた。策士雲井龍雄と月見をした海嶽樓はこの家の二階である。

幕府滅亡の餘波で、江戸の騒がしかつた年に、仲平は七十で表向隠居した。間もなく海嶽樓が類焼したので、暫く藩の上邸や下邸に入つてゐて、市中の騒がしい最中に、王子在領家村の農高橋善兵衛が弟政吉の家に潛んだ。須磨子は三年前に飢肥へ往つたので、仲平の隠家へは天野家から來た謙助の妻淑子と、前年八月に淑子の生んだ千菊とが附いて來た。産後體が悪かつた淑子は、隠家に來てから六箇月目に、十九で亡くなつた。下總にゐた夫には逢はずに死んだのである。

仲平は隠家に冬までゐて、彦根藩の代々木邸に移つた。これは左傳輯釋を彦根藩で出版してくれた

縁故からである。翌年七十一で舊藩の櫻田邸に移り、七十三の時又土手三番町に移つた。

仲平の亡くなつたのは、七十八の年の九月二十三日である。謙助と淑子との間に出来た、十歳の孫千菊が家を繼いだ。千菊の夭折した跡は小太郎の二男二郎が立てた。(終)

二五 阿新丸

出 所

【太平記】 花園天皇の文保二年二年（一九七七）から後村上天皇正平二十二年（二〇二七）まで凡そ五十年間に於ける南北兩朝前後に戦亂の事實を記した四十卷の書。作者は文中三年歿の小島法師と洞院公定公日記にあるが、信じ難い。南北朝の末頃、南朝方の手になつたことは明らかである。書名も安危由來記、國家治亂記、國家太平記、天下太平記等四變したといはれてゐる。此の書が愛讀せられたのは江戸時代の初期、太平記讀の出たことが大いに與つて力あるのであらう。異本も頗る多く十數種に餘つて、今出川本、島津家本、南部本、毛利家本、北條本、西源院本、今川本、天正本等がある。

要 旨

孝子阿新丸の史談を授くると共に室町期に於ける戦記文の形式に觸れしめ時代語に關する智識を與へたる。

段 落

- 一、さるほどに……下知せらる。(一五四頁一行目)
資朝卿死罪に評定一決のこと。
- 二、このこと……御暇ぞ乞はれける。(一五四頁七行目)
阿新丸、父の最期に逢はんため佐渡へ下向を母に請ふこと。
- 三、母御頻りに諫めて……佐渡の國へぞ下されける。(一五五頁一行目)
母遂に許可を與へ中間を添へ遣はず。
- 四、路遠けれど……疎かならぬ體にてぞ置きたりける。(一五六頁一行目)
阿新本間が館に到着のこと、並に本間が勞りの心を表すること。
- 五、阿新殿……父子の道こそあはれなれ。(一五七頁二行目)
對面を許されざる父子、悲の更に切なるものあり、互に悶絶懊惱すること。
- 六、五月二十九日の……泣悲しむも理なり。(一五八頁十二行目)
資朝卿所刑の模様。
- 七、阿新未だ……思ひ定めてぞ狙ひける。(一五九頁八行目)

阿新丸、本間刺殺を決心のこと。

八、或夜雨風烈しく……竹原の中にぞ隠れける。(一六一頁八行目)

阿新丸、狙ふ敵本間入道を見出すこと得ずして、下手人本間三郎を刺殺す。

九、本間三郎が……問ふ音してぞ過行きける。(一六三頁一行目)

本間が館の驚駭、並に阿新首尾よく脱のこと。

一〇、阿新その日は……湊にぞ着きにける。(一六三頁十一行目)

阿新、山伏に助けらるること。

一一、夜明けて……終まで。

山伏、靈驗を表はして船を呼び阿新を無事越後の國府に送り着くること。

解 釋

【阿新丸】 クマワカマル。權中納言日野資朝の子。阿新丸はその幼字。高時誅に伏するや、阿新元服して邦光といひ、出でて後醍醐天皇に仕へ、左兵衛權佐となり、後村上天皇

の時、左兵衛督に昇る。正平五年勅を奉じて鎮西に至り、宇治惟澄を促し、兵を發して敵を撃たせた。後、中納言となる。十六年藤原隆俊及び細川清氏等と足利義詮を討つて之に

克ち、尋いで歸る。

【君の御謀叛】 後醍醐帝の北條氏討滅の御計畫をいふ。甚だ穩かならぬ書き方であるが、大義名分の明かならぬ時の事ではかたがな
ま。

【源中納言具行】 師行の子。後醍醐帝に仕へて帝の高時を誅せんとせられたとき、命ぜられて兵を徴したが、事敗れて笠置に據り、ついで城陥り、囚はれて近江柏原に斬死。

【右少辨俊基】 藤原俊基。世々儒業とし、才學優良。後醍醐帝の寵を得、資朝と共に復興を計つて成らず、北條氏に捕へられて關東に下る。太平記の俊基朝臣東下りの條で知られてゐる。元弘二年葛ヶ岡で殺された。其の

偽、「古來一句、無死無生、萬里雲盡、長江水清。」

【日野中納言資朝】 藤原資朝。俊光の子。家を日野といふ。才學人に秀で後醍醐帝の優遇を得、歴任して檢非違使の別當、權中納言となつた。北條氏に捕へられて佐渡に流罪七年。佐渡の守護本間山城入道、高時の命に依つて之を殺した。阿新丸は其の子。

【評定一途】 ヒヤウチャウイチツ。武家時代の語、評議の決定が一致したこと。評議一決。

【本間山城入道】 傳不詳。

【下知】 ゲチ。指圖。いひつけ。命令。

【囚人】 メシウド。召し人の普便。罪人。

【仁和寺】 ニンナジ。山城國葛野郡花園村字

【中間】 チウゲン。侍と小者との間にある雑卒。長門本平家物語に「入道（清盛）小平太

といふ中間を召して」とあるが始め。今の召使者。

【菅の小管】 菅の葉で編んだ小形のかぶり笠。

【越路の旅】 コシチのタビ。越路は、今の北陸道を云ふ。越の國即ち今の越後の國に往來する沿道の義。

【敦賀】 越前國敦賀郡にある、今敦賀町といふ。

【商人船】 アキウドブネ。

【中門】 チュウモン。邸内に設けた門で、外門の内庭から寢殿の前庭に入る門。

御室にある。光孝天皇の勅願により、仁和二年八月、小松卿大内山の麓に造營の工を起し、未だ出来上らぬうちに崩御あり。宇多天皇が先帝の遺志を繼いで、同四年八月落成供養あり、大内山仁和寺の勅號を賜うた。天皇讓位の後この寺で出家し給ひ、延喜元年十二月、その南に一字を造營し之に遷御あつたから、世に御室と稱する。宗旨は眞言宗で宇多法皇を開祖とし、爾後親王相承け、御室門跡と號する。

【最期】 サイゴ。臨終。

【目の前に憂きも別も云々】 阿新丸は目の前で直に自殺するかも知れないと。

【思ひ侘びて】 思ひなやんで。

【岩木ならず】 岩や木の如く無情でなく、人間らしく血あり、温味あること。萬葉集にも出てゐるが、伊勢物語に「昔男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。岩木にしあらねば心苦しとや思ひけむ、やう／＼あはれと思しけり。」とある。

【持佛堂】 朝夕信仰する佛像を安置する所。先祖の位牌所をもいふ。また念誦堂ともいふ。

【蹈皮】 タビ。昔は革足袋。

【行纏】 ハバキ。脛穿（はばき）の略で脚絆のこと。

【疎ならぬ體】 オロソカならぬテイ。疎略にせず大切にすること。

【なか／＼】 中古語の用法では「かへつて」

の意。

【よみぢの障】 死に行く人の極樂往生の障。成佛の出来ぬこと。こゝは愛兒の顔を見せては、死に行く親の心に愛着の煩惱を起させて迷はしむる基となるから、後生の障とならうといつたのである。

【關東】 鎌倉の北條氏。

【鄙の住居を思ひやりて云々】 自分が都に居つた時、佐渡といふ邊鄙の地に住居して居らるゝ父の身の上を想像して心苦しく思ひ、涙を流してゐたが、それも今から考へて見ると只今の悲しさに較べては言ふに足らぬ程、切ない思がする。

【生を隔つ】 世を隔てゝ生れる。

【無からん後の昔の下】 自分が死んでから後の世。

【思ひ寝に見ん夢】 父を思ひながら寝て夢に見ること。續後撰和歌集卷十二・戀歌。皇太后宮大夫俊成女の歌「思ひ寝の夢よりほかに道もなし、心のかよふまぼろしもがな。」

【うたてし】 (一)甚し、あまりなり、情なし、薄情なり。(二)不覺なり、笑止なり。(因圖)こゝでは(一)の意。

【氣色】 ケシキ。心地・機嫌。

【頭燃を拂ふ】 ツネンをハラふ。何も思ふことがない。天台三大部補註第十四「譬如男女有_二火燃_一頭、救令速滅_也。」こゝは人間の事は、頭燃を拂ひ去つたやうに全く忘却し果て

たさまになしての意。

【綿密の工夫】 他念を絶つて一心に佛の道を思ひ修行すること。

【敷皮】 シキガハ。毛物の敷物をいふ。地上にかりそめに居る時に敷く。多くは鹿の毛皮で作られ、長さ三尺許幅二尺餘で、白毛を少し残して截る。上を櫛形又は櫛上といひ、下を白毛といふ。裏は白布に粉のりをつけて白くする。又この外に熊皮虎豹の皮の敷物もあつた。

【辭世の頌】 頌は本來功德を稱贊するほめことば。こゝでは偈（うた）と同意にて、死に臨んで作つた詩歌。

【五蘊云々】 増鏡下には四大本無_二主_一、五蘊

本來空、將頭傾。白刃、但如鑽夏風。」とある。五蘊とは色、受、想、行、識の五で心身のこと。一色四心の謂で、色蘊は五體の身骨、識蘊は心の正體、受、想、行は心所をいふ。舊譯では五陰と書く。

【四大】 四大種の略。地・水・火・風の四つが合して一身をなすをいふ。即ち色蘊。一切有形有質の物は四大の所造和合であるといふ。智度論「先世種々善音聲因縁、故咽喉中得微妙四大。」

【一陣風】 一陣の風が颯と吹く程の我が身と觀じた意。

【五蘊假成形云々】 全意は、吾が身は、もこれ五蘊の假りに集まつてこの體を形造つ

ただけのものである。今や四大各散して空に歸せうとする。白刃首に加はつて截斷すれば、ただそれ一陣の風の一過するやうな我が身である。

【法談】 法義の談話。說法。

【取る手もたゆく】 撓く。疲れて力ないこと。骨を受取る手がたよ／＼とすること。

【健氣】 ケナゲ。をし。殊勝。

【奥の院】 高野山中の奥の院。一の橋から師廟まで十八町の間をいふ。

【勞る】 イタハる所勞。病氣のこと。こゝは病氣の體での意。宇津保「日ごろいたはる所侍りて院にも内にも参り侍らぬ。」

【入道父子が間に云々】 入道父子の中にて

誰でも一人さし殺しての意。

【宿直】 トノキ。禁中又は役所に宿つて守護すること。

【遠侍】 トホザムラヒ。古、中門の廊下の傍にあつて宿直の武士の詰所。侍は又侍所ともいふ武士の出仕する所。その遠近・方角によつて一々名をつけた。即ち主殿に近きを内侍、遠きを遠侍（又外侍）小侍の出仕する所を小侍といひ、その他東侍、西侍、南侍、北侍等がある。

【二間】 フタマ。佛など安置して、夜居僧などの詰める室をいふ。寢室の傍にある。

【本間三郎】 傳不詳。

【太刀】 タチ。刀の長大なもの。紐で左の腰

に佩く。

【刀】 カタナ。短小で片刃の武器。

【左右なく】 サウなく。かれこれためらはず。たやすく。宇治拾遺「さうなくはえせめ給はじと思ひて。」(因圓)

【蛾】 ガ。ヒビル。蝶類の成蟲。

【明障子】 アカリシヤウジ。今いふ障子のこと。障子とは、もと間と間とを障へへだてる物の總名で、今の襖のことをも指していつた。それを區別する時は明障子と襖障子とに分けられる。

【究竟のこと】 クツキョウ。又クキョウ。極めて都合よきこと。あつらへむきなこと。

【今はかうと】 今は早や斯くせんのみと嬉し

く思つての意。

【驚かす】 目を覺まさせる。

【一の太刀】 初太刀。

【竹原】 サ、ハラ。小竹のしげれる林。

【番衆】 殿中の宿衛を勤番する者。番方ともいふ。

【木戸】 キド。もと城の門。轉じて邸宅の門口、芝居見せものに於ける見物人の出入口に
いふ。こゝは館の門口。

【よも】 恐らく。

【松明】 タイマツ。たきまつの音便。松の膏の多い部分で作り暗夜に道などを照すに用ふ。後竹葦など一般燃料を束ねても作る。

【素意】 平素ののぞみ。

【口】 幅をいふ。

【落ちて】 逃げることを忌みてかくいふ。

【吳竹】 クレタケ。昔吳國から渡來したといふ竹。葉細く節多く杖又は細工用にする。

【そことも知らず】 處きはらず。行方を定めず。

【兒や通りつる】 兒が通つたでせうか。

【湊】 浦河港か。

【擁護の眸をや云々】 守らせ給ふ慈悲の眼をそゝがれたのであらうの意。

【山伏】 ヤマブシ。又山臥とも書く。野山に伏して苦行をなし神験を修得する者後には修験者の稱ともなる。護摩をたき呪文を唱へて祈禱をなす優婆塞にて、眞言宗のは僧形をな

し、天台宗のは有髪である。何れも役の行者の流を汲む者。

【御渡り候ぞ】 おいでになるのか。近古室町時代の語。

【かはゆき目】 衰れな目。ひどい目。つらい目。

【足たゆめば】 阿新丸が疲勞すると。

【便船】 ビンセン。幸便の船。ちようど都合のよい船。

【篷を捲く】 トマをまく。篷を巻き上げて出船の用意をすること。篷は菅、茅、竹などで編んで船の上を覆ひ雨露を防ぐもの。苦。

【たび給へ】 給へを更に敬つた語。此の時代の軍記物に多く出づ。

【聲を帆にあぐ】 帆と共に聲を高くあげて

歌ふこと。古今集卷四「秋風に聲を帆にあげて来る船は、天の戸わたる雁にぞありける。」

【柿の衣の露】 柿の衣は柿色無紋の衣。正先達の位の者之を著す。露は衣の袖括の緒の垂れた端をいふ。其の様恰も露の滴つてゐるやうであるためにいふ。

【いらたか珠數】 つぶの平たくして稜立ちたる念珠、修験者の多く用ふるもの。(刺高珠數)

【明王】 ミヤウワウ。眞言で五大明王の主尊、不動明王、不動尊、不動使者ともいふ。大日如來の教令を奉じて、忿怒の形をなし、一切の惡魔を降伏する眞言王。

【本誓】 ホンゼイ。梵語三昧耶。もとは因本の義。諸佛菩薩と因地を立てた根本の誓約。

【たばせ給へ】 賜はせ給へ。

【肝膽を砕く】 非常に苦心する。源平盛衰記

「肝膽を砕いて精誠を盡し祈りうまれまゐらせぬ。」

【行者】 ギョウジャ。佛果に依つて行を修め

る者。修行者。

【御坊】 ゴバウ。御僧。坊は本來僧の住居してゐる家をいふ。

【屋形】 舟の内に屋根の形した處が作つてある、其の處をいふ。

【越後の府】 今の直江津町。

鑑賞

未だ幼少の身ながら父を思ふ心の厚い阿新が、よしや敵と狙ふ本間入道父子を殺し得なかつたにせよ、その下手人を刺し止めて本懐を遂ぐるに到るまでのその劇的動作は、婉滑遒勁なる行文に依つて遺憾なく發揮せられてゐる。阿新丸の男らしさと奇智とを想ふと共に、漢語佛語を自由に使ひこなしてその妙境にまで達してゐる戦記文の特色をも併せて鑑賞すべきである。

二六 長柄堤の訣別

作者

【坪内逍遙】 名は雄藏。文學博士。英文學者。早稻田大學名譽教授。安政六年五月二十二日美濃國加茂郡太田村尾張代官所に生れた。明治九年東京に遊學し明治十六年東京帝國大學政治科を卒業し、東京專門學校（今の早稻田大學の前身）に教鞭を執り、尋いで早稻田大學教授となり同校文科の柱石として多くの秀才を其の門から出した。十八年文學論「小説神髓」を著して藝術の至上目的は人生の真相を描くにある事を主張し、勸善懲惡主義の小説を難じた。これ實に我が邦に於ける文藝革新の最初の警鐘であつた。なほこの論を裏書する具體的小説一篇を著した。「當世書生氣質」これである。又雑誌「早稻田文學」を創刊して新文藝の鼓吹に努めた。脚本「桐一葉」「牧の方」「沓手鳥孤城落月」「名残の星月夜」「義時の最後」「法難」等の外、樂劇では「新樂劇」「新曲浦島」「新曲かくや姫」等の作がある。氏は新しい論を立てては之を實際の作物によつて模範を示すといふやうに作と論と相俟つ

て劇壇の啓發に力め、四十二年文藝協會を起して新劇勃興に魁した。沙翁研究に於ては世界的の大家でその翻譯は二十篇あり、我が文壇の誇である。「文學そのをりく」「英文學史」等の外、倫理の方面の著書も多い。大正十一年の春頃からベーチェント劇を鼓吹し博士自身にも例の具體的見本としての創作がある。同冬になつて家庭用兒童劇數種を選んで早稻田大學より出版した。最近作の戯曲に「長生浦島」「大いに笑ふ淀君」等の他、常用漢字の問題を取扱つた長篇の論文も發表して多方面の活動をなし、老いて益盛なりの氣勢を示してゐる。

出 所

【桐一葉】（讀み本體）逍遙博士が自序中に書かれてゐる通り、初めは鶴田沙石子の稿を補修される積りであつたのが、構想上さうもならず、全部創作されたのである。着筆は明治二十七年十一月で、翌年九月まで連月「早稻田文學」誌上に掲載發表された。單行本として上梓されたのは、明治二十九年二月。（春陽堂發行、定價五十錢）

博士がこの境遇悲劇を作られた理由は、自身に、なか／＼複雑である、と言つて居られるが、第一の動機は確かに當時の我が演劇革新の實際化に役立てんとしてであつた。即ち從來の形式に新しい實質を與へる反響は大なるものであつた。しかし實際舞臺に上つたのは、それから丁度十年の後であ

る。

この作は後年更に實演用として著者自らの手によつて改作され、大正六年以後の上演は全部後者を臺本としての演出である。（明治大正文學全集——大村弘毅）

本課は作者が會て主張した性格劇の脚本として、自ら提供した「桐一葉」の大詰の一場面である。片桐且元が大阪城をのがれて、居城茨木に歸らうと長柄堤にさしかゝり、そこで木村重成を待ちながら太閤の盛時を忍んでゐたが、やがて馬を走せて來る重盛と會し、大阪籠城の計を議し、豊臣家の衰運を嘆きつゝ袂別するといふ筋である。

「桐一葉」は、大阪落城前の正史上の事實に基き、片桐且元の苦衷、淀君の嫉妬、大野父子の偏執を經とし、蜻蛉といふ可憐な乙女の病死、銀之丞といふ痴少年の失戀等を緯として、七幕十五場に脚色して織出した劇。人物の性格をあらはさうとつとめた點で、我が國脚本界に一新紀元を作つたものである。

桐一葉創作の由来——

人間の悲劇は種々である。例へば我が性の過失が因となつて、悲惨な業報を招くこともあれば、半以上は境遇の爲に悲運に陥ることもある。比較的單純な夫婦親子の間の關係に於てさへも、時とす

れば然ういふことがある。まして、一國の興亡、一大權勢の推移等を主眼とした場合の個々人の運命は、半以人境遇に支配されるものではないか？ 即ち、かゝる場合には、主なる人物をして窮地に陥らしめる原因は、——幾分かはその性にも胚胎するであらうが、——寧ろその周囲の種々の事情や事件の合成力であると解すべきではあるまいか？

かういふ境遇本位の悲劇を寫すのが、この作を書く一の動機であつたといふ。而して作者はその動機を、この他に二つ述べてゐる。

桐一葉劇の主題——

衰運に魅入られて、將に解體せんとしてゐる一政治的團結の内情！ 白蟻の巢となつて將に覆らんとしてゐる一大伽藍！ それを支へようとしてギョ／＼と音を立てゝゐる只一本の角柱！ せめてもう五六本もあればだが、その他の柱は、大概皆疑惑や猜忌や偏執や嫉妬や反間苦肉などいふ白蟻に喰ひ入られてしまつてゐて、役に立たぬばかりでなく、ます／＼白蟻の眷族を繁殖させて行くばかりである。それであつて、眞の柱ども自らはそれを知らず、皆伽藍を倒れさせまいと氣をもんでゐるのである。で、一人も悪人はゐない。が、皆敵でもある。按ふに、かういふ境遇に立つては、恐らく、如何な英雄でも天才でも、如何することも出来まい。いつそ直にがらと來てしまつた

ら、却てサムソンなどのやうに目覺ましい最期を遂げられるのだが、彼の夏冬の大暴風が來るまでは、流星は大伽藍、少くとも外見にはその氣も見えぬのである。で、この理の解つてゐる者が、極めて少數であるといふことが、この劇の主人公の境遇悲劇たる所以である。

とある。いかにも面白い言葉である、又、

且元を自殺させないから悲劇にならぬといふ非難が、その當時にも後にもあつたが、それは單に歴史的事實が許容しない許りでなく、初めから作者の主旨とする所でなかつた。といふのは、私は、寧ろ死ぬことも生きることも出来ぬ境遇上の悲劇といふ點に興味を感じてゐたからである。(以上、現代戯曲全集第一卷——坪内逍遙)とは、特に傾聴すべき言である。

要 旨

一、坪内逍遙氏の「小説神髓」と「書生氣質」が明治文學界に於て小説の先驅をなしたと同様に、「桐一葉」は實に新しい明治の劇壇に對する先鋒となつたものである。その劃時代的作品を味はせたい。

二、豊家衰運の一犠牲となり、死ぬことも生きることも出来ぬ境遇上の悲劇の主人公片桐且元の性格と苦衷、彼を圍繞する雰圍氣を味はせるは勿論、彼の義心、重成の意氣などを會得させたい。

段 落

一、晨鷄再び鳴いて……長柄堤にさしかゝる。(初から七行目まで)

地の文。

所は長良堤。時は秋の未明。

且元、居城茨木に歸らんとして長良堤にさしかゝる。

本課は冒頭を省いてをるので、今少し詳しく原文のままの筋書を辿ると次のやうになる。

大野治長の家の子が、茨木の居城に忍び歸らうとする片桐且元の動靜を窺ひ、その途中に於て、且元に害を加へようとして待つてゐる。

それを且元の郎黨十河十兵衛が見つけて撃退する。

且元は弟貞隆(主膳)を一足先に立たせて、自分は木村重成に會見せん爲使を走らせ、尙もこの堤上で待たうとする。

二、後には何か一思案……心元なきことどもぢやなあ。(一四九頁の二一行目まで)

「木村重成の所に行つた使は、重成が今すぐこゝに来るといつて歸つて來た。いよ／＼弟と別れる。」

といふ所がこゝでは省かれてゐる。

その待つ間、且元はすごい落月の下、遙かにそれと覺しきお天守を拜し、故太閤殿下の盛時を偲び、うたゝ現時の主家の有様に悲憤慷慨の涙を流し、又自らの苦境を考へ、萬感胸に迫り、故秀吉に向つて、さながら在世の時の如く、兩手をついて御詫びをする。

三、すかし眺むる折こそあれ……(終りまで)

さうしてゐる所へ、汗馬に鞭つて來たのは待つてゐた重成。これからが本課の主題である。

1、すかし眺むる……影なるか。(一五五頁の終から二行目まで)

且元がわざわざ重成を呼び寄せたのは外でもない。將に傾かんとする主家の後事を重盛に具され托せんが爲であつた。日頃からこの時の必ず到來せんことを慮つて手配りしてあつたことを重盛に傳へ、後事を頼むのである。

2、是非もなき……(終りまで)

地の文。

さて何時までもかくしてもゐられない。主家の安危を氣にしながら、明け初める長良堤の霧の中で東西に別れるといふのである。

解 釋

原文の冒頭は次のやうである。

まだ明けやらぬ長良堤、てんでに鐵砲小具
足でだち、手の者引具し駈け來る、大野が
家の子白倉權六、木かげにかくれて待つ間
もなく、又も一人忍びのいでたち、を中飛
んで駈けつくる、ありあけ影にすかし見て

白「神崎氏か 神「さいふは白倉權六どの 白
首尾は 神「上々、おっつけこれへ片桐主從
白「シイコレ○卑怯者の片桐且元、昨日お
討手向けられし折、一定生害して相果てん
と、我れ人共に存ぜし所、臆病にも命を惜
み、逃げ仕度は腰抜け武士、取るに足らず
と侮りしは我々共が浅い料簡 神「取逃さば
關東へ、虎を放つも同然と、御主君修理亮

さまの仰せを受け 白「元へ廻つて埋伏な
し、堤へかゝるが火蓋の合圖 神「三十餘挺
一時に、切つてはなさば骨灰微塵 白「ねら
ひの的は只一人 神「ものども必ずぬかるま
いぞ 昔「心得ました

合點がつてんの耳のはた、ズドンと一聲、
飛び來る彈丸、アツと玉ぎる神崎治右衛
門、尻居にどうと息絶えたり、これはいか
にと一同が、あわつる向うに大音聲

十「卑怯無慚の大野が一黨本「かくあらんと
兼ての手配り 十「主君を守護する我々ども
本「遺恨の太刀先き昔「うけて見よ白「何が
何と

呼ばはり／＼木蔭より、切先き揃へ無二無

三、片桐が郎黨十河十兵衛・本村清藏、眞
先きに駈けいづれば、不意を撃たれし大野
が手の者 荒肝ぬかれ切りたてられ、火蓋
切る間もあらばこそ、右往左往に逃げ散つ
たり、流石に恥を白倉權六、ふみとどまつ
て二打ち三打ち、するどき十河が太刀先き
に、敵しかれて逃げいだすを、いづくまで
もと追うてゆく 藥を食ふことは難しと雖
も、未だ如かず、生きて別かるゝことの難
かるには、苦きことは心肝にあり、晨鷄再
び鳴いて……

となるのである。

【長柄堤にさしかゝる】 の次には原文に
は、

(前につづいて地の文)その時市ノ正手綱を
ひかへ、從兵を先きへ進ませ、弟主膳ノ正
を呼び近づけあらためていひけるやう

片「いかに弟、我れ昨日討手を待受け、自

殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が殘兵ぬけ
がけなし、討手の荒膽をひしきし爲、備へ
ありと見たがへしか、また寄せ來らん模様
もなく、刺へ夜に入りては、外に在りし家
の子まで、變を聞きつけ馳せ集まり、血氣
のともがらこれに氣を得て、薪に油をそゝ
ける如く、弓鐵砲とひしめき騒ぎ、いひつ
けをきかばこそ、打棄おかば、珍事に及ば
んも圖りがたく、暫く彼等をなだめん爲、
一先づ茨木へ引退き、後事を圖らんとはい
ひしものゝ、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織
田入道も君を見限り、俄かに京表へ退去の
由、お家の危機いよ／＼迫んぬ、今にも關
東と隙を生じ、大事に到らんこと必定な

り、それにつき所在あつて、先刻今村三右衛門を、木村が邸へ走らせたり、おツつけ三右が吉左右あらん、我れこれにて相俟つべし、御ん身はしばらく我れに代り、手勢を差配し途中に不慮の間ちがひなきやう、一足先きへまゐるべし

ト言葉のうち、はるかにしたひ駈ける足おと

主「あの足おとは、たしかに今村、片「三右衛門か、今「我が君これにござありしか、長門様にはおツつけこれへ、片「ホ、大儀々々、満足なるぞよ、しからば主膳は一足先きへ、三右衛門もこゝかまはず、我れはこれにて相俟つべし、主「仰せではござります

れど、油断ならざる當節柄、如何なる變事あらんも知れず、今「只御一人此の處に、御座あらんは心えなし、主「せめて我々二人「兩人は片「ハテ入らぬ遠慮、氣づかひ致すな、往け、主「ちやと申して片「ハテ往けと申すに二人「ハ、ア

顔見合はせて是非なくも、主膳を先きに三右衛門、心残して行き過ぐる後には何か一思案

とつづくのである。その他、なるべく原文について、以上のやうな舞臺面の空氣を十分に呑みこませて戴きたい。

【晨鷄】 シンケイ。鳴きて曉を告ぐるにはとり。天國「再び鳴いて」とは二番鷄をいふ。

【殘月】 夜明まで残つてゐる月、殘んの月、

有明の月。天國

【征馬】 セイバ。たびちに乗り行く馬。たびゆく馬。又、征途にある馬。天國

和漢朗詠集源順の聯句に、「南望則有^二關路之長^一行人征馬^二絡繹於翠旛下^一。東顧望亦有^二林塘之妙^一紫鸞白鷗道^二遙於朱檻之前^一。」

【はや分れゆく横雲】 東方にたなびける横雲が、日の出ようとする時左右に分れゆくこと。「横雲」ヨコグモ。横にたなびく雲。たな雲。天國後撰集、「横雲は峯にわかれて、逢坂の關路のとりの聲ぞあけぬる。新古今集、「春の夜の夢の浮橋とだえして、峯にわかるゝ横雲の空。」

【いなめ】 いなめのめめ明くといふ意より轉

したるか。あかつき。よあけがた。歌林拾葉三「あちさるの花のよひらはおとづれて、なごいなめのめめ情ばかりぞ。」天國「いなめのめめ」寢寐の目の意。明くといふ語の枕詞。轉じて直に天明（アケガタ）。音瀬

【長柄堤】 ナガラツツミ。長柄は大阪府下西成郡にあつたが、今、大阪市東淀川区豊崎町と改められた。長良堤は即ちこの地を流れる長柄川の堤である。長柄川は木津川ともいつて、淀川の一支流である。蘇村の春風馬堤曲に、「やぶ入や浪花を出でて長柄川。」「春風や堤長うして家遠し。」

【一むら蘆に風黒く】 一むら蘆即ち一群蘆に風が荒く吹いたのである。暴風を黒風とい

ふから「風黒く」も據り所があるといふてよ
す。

【有明】 アリアケ。月は天にありながら、夜の明くること。十六夜以後の月にいふ。残月。〔音〕

【狭霧】 サギリ。「狭」は發語、霧といふに同じ。因にいふ、「發語」とは、某語を言はんとする時、首に加へて發する聲なり。その聲一音にして、大抵は、意義無く、或は稍、その下の語意を強くするが如きものあり。而してその用例、亦、かぎれる所あり。——さ夜・さ衣・さ男鹿・さ渡る・さ迷ふ・み吉野・み熊野・み山・み空・み雪・み坂・み岬・を廉・を田・を野。〔音〕

原の役後、秀政退きて且元獨り傳たり。心を盡して秀頼を輔翼し、諸務を總理す。是時にあたり、徳川氏已に天下の覇權を握り、豊臣氏なほ先世の餘威を恃み、兩家の衝突將に生ぜんとなす。且元力めて調停を圖り、群小のため忌まる。慶長十九年方廣寺鐘銘事件により、秀頼家康と隙を生ぜしかば極力斡旋救済せしも成らず。却つて淀君治長等はこれを召して殺さんとす。事泄る。且元やむを得ずその邑茨木に退く。既にして家康且元を駿府に招く。辭して行かず。本多忠純をしてこれを邀へしむ。元和元年四月の初、且元家を駿府に移し、疾に興して赴く。尋いで大阪の陣再び起り、その年五月大阪城陥り秀頼母子自盡

【いとど】 最最(イトイト)の約。彌、甚しく。ますます。〔音〕

【深更に邸を立つて】 原文には、「寅の刻に邸を立つて」とある。寅の刻は、午前四時。

【片桐市正且元】 カタギリイチノカミカツモト。小字は助作、初め直盛といひ、後に且元と改む。片桐直貞の子、近江の人なり。豊臣秀吉に仕へて戦功あり。殊に志津ヶ嶽に於ては、七本鎧の一人として大に勇名を博す。封を受け従五位下に叙し天正十三年東市正に任ぜらる。後小出秀政と共に世子秀頼の傳となる。秀吉薨するに臨み、病床に召して後事を懇囑す。石田三成等の兵を擧げんとするや、これを制止せんとせしかど成らず。關ヶ

す。且元途にこれを開き、羞慚の極、劍に伏して歿す、年六十。〔音〕大日本人名辭書には、慶長六十二とあり。後者の方正しきか。

【茨木】 茨木町は攝津三島郡の首都。大阪の北約四里、人口約五〇〇〇。東海道線鐵道驛。城は福島氏始めてこれを築き、永祿中中川清秀がこゝに居り、慶長十八年片桐且元がこゝに封ぜられたが、大阪役の歳大和國龍田に封を移されたのでこの城は廢せられた。

【郎黨】 ラウダウ。わかもの。家來。從者。郎從。郎等。〔音〕

【寂然】 原文にはセキネンと訓ませてある。さびしいさま。又動かないさま。易經に「寂然不動感、而遂通天下之故。」

【塙】 ネグラ、トヤ。鳥の寝る處。源氏物語梅枝に「霞だに月と花とをへだてずば、ねぐらの鳥もほころびなまし。」

【模糊】 モコ。類書纂要「不分明貌。」

【くだかけ】 腐鶏。鶏をいたく惡み罵りたる言。因國和訓栞に「くだかけ、東國には家をくだといふといへり。かけは鶏をいふ也。一説に鶏を梵に矩々吃駢設羅といふを略してくだといひ、梵倭兼稱するにやといへり。一説に百濟鶏ハクセキの義。今の唐丸なるべしといへり。或は聲を稱して管掛といふ也。」伊勢物語に「よもあけばきつにはめなんく、だかけの、まだきになきてせなをやりつる。」天木和歌抄二十七に「くだかけはいづれのさとをうかれき

て、まだ夜ぶかきに八聲なくらん。」

【生氣溢るゝ東の空】 關東即ち徳川方を意味する。

【枯葉枝まばらにして風飄々】 枯葉といひ、枝疎といふのも、皆上句の柳についていふのである。飄々は風の吹くさま。陶潛の文に「風飄々而吹衣。」

【おぼろ〜】 おぼろは判然せないこと。さだかならぬこと。ぼんやり。うつすり。

【名に大阪】 名におふの「おふ」を大阪にいひかけたのである。「名におふ」とは名と實の相應してあること。さすがにその名あるほどなりといふこと。又名高い意。本文はこの意。大阪市は攝津國の東南部大阪灣頭にあ

る。我が國第二の大都會であつて、東京市を距る百四十一里、淀川の支流、安治・木津の兩大川が市中を貫流して、多くの運河がその間に連りて舟楫に便してゐる。

【四衢八街】 シクハチガイ。衢は四達の道。街も同じ。四衢八街とは市街の大きくて、四通八達するのをいふ。沈約の詩に「四衢道難闡、八正扉猶掩。」三輔舊事に「長安城中八街九陌。」

【悄然】 原文にはセウネンと訓ませてある。興さめ、勇氣くじけたさま。憂ふるさま。又さびしさうなこと。悄乎、悄々、悄切みな同じ。詩經の邶風に「憂心悄々。」

【天守】 城の本丸に殊に高く設け構へた物見

櫓。三層・五層又は七層から成る。書言字考に「殿守又作天守、松永久秀於和州多聞城造望樓、名曰殿守、天正四年織田信長取則於彼、建殿守於江州安土城。」また甲子夜話に「天守、以前は天主と書きて櫓の上層に天帝を祭ることゝぞ、然るを上杉謙信天主の稱を惡み、これを天守と改め、須彌の天主は毘沙門なりとて、これを祭りしより、今皆天守と書くなり。」など諸説あるも、天正十九年に成つた三川分類記に既に天守の字が見えてゐる。

【南山不落】 南山は終南山で、周の都であつた豊鎬の南にある。詩經の小雅天保篇に「如月之恒、如日之升、如南山之壽、不騫不。」

崩」とあるから、轉じて祝ふことに用ひられる。本文は南山のやうにいつまでも城が落ちない意。

【故殿下】 殿下は國王又は太子・親王・諸王等皇族の御名の下につける敬語。中世より關白にもいふ。こゝは秀吉のこと。西陽雜俎に「秦漢以來天子言陛下、皇太子言殿下、將軍言麾下、使者言節下、殿下、二千石長吏言閣下、父母言膝下、通類相呼言足下。」また關白以下の代名詞として用ひられる。大鏡に、「只今入道殿下の御有様をも申しあはせばや。」

【礎ゆらぎ】 礎はイシズエ。家のどたい石。礎ゆらげば家屋倒る。豊臣家の將に倒れよう

とすることをほのめかしたのである。

【加藤肥州】 肥後守清正。

【逝去】 死去。逝は去る。亡ぶ。故に死亡を長逝・遠逝等ともいふのである。俚言集覽に「逝去、(古今著聞集十一)繪師大輔法眼賢慶が弟子に某とかや云法師ありけり。賢慶逝去の後云々とあり。今は貴人ならでは逝去といはず、此の頃は平人にも稱すと見えたり。」

【才略】 才智計謀のあること。後漢書の鄭太傳に「太少有才略、陰交結豪傑、名聞山東。」晉書の明帝記に「爲太子、性至孝、有文武才略、欽賢愛客、雅好文辭。」

【阿附黨同】 阿附はおもねりつく。事の善惡理非に關せず、他の言ふ所に同意してその歡心

を買ふこと。後漢書の李膺傳に「南陽樊陵求爲門徒、膺謝不受、陵後以阿附官官爲節志者所羞。」黨同は偏黨に同じく、己と心の同じきものに黨すること。後漢書の黨錮傳に「自武帝以後、有石渠分爭之論、黨同、代異之說、守文之徒盛於時矣。」

【相闘ぐ】 アイセメぐ。互にうらみあふ。互にあらそひあふ。互に非難をしあふ。

【大政所の御方さへ當家を餘所に見そなはし】 大政所(オホマンドコロ)は攝政又は關白などの母の稱。始めは大北政所といつたが、後には略して大政所というた。攝政關白家の妻室を北政所といふから其母を尊んで然か稱する、後には他家にても宣旨を蒙つて大

政所と稱す。本文は名義が穩當でないけれども、秀頼の嫡母即ち秀吉の正室高臺夫人をさすのであらう。高臺夫人は尾張津島の人、名は寧々。淺井長政の従妹である。北政所と稱し、秀吉の薨するに及んで薙髮して、高臺院湖月尼と號した。大阪役の當時別に何等の相談にも預らず、亦自ら進んで事をなさず、豊臣家の滅亡を見ること對岸の火の如く、十年の後寛永元年卒した。「御方」オンカタ。「當家」タウケ。

【みそなはす】 御覽す。見たまふ。

【唇齒已に亡ぶ】 左傳僖公五年に、「晉侯復假道於虞、以伐虢、宮之奇諫曰、虢、虞之表也、虢亡、虞必從之、諺所謂輔車相依、唇亡齒寒者

其虚號之謂也。戰國策に「趙於齊楚也、隱敵也、猶齒之有唇也、唇亡則齒寒、今日亡趙、則明日及齊楚。」本文は頼むべき所を失つたことをいふ。

【金城湯池】 城池の堅固なことをいふ。城の堅いこと金のやうで破ることが出来ず、池水の熱すること湯のやうで近づくことの出来な^い意。因^{（因）}北齊書に「唐有治世才、文宣帝登^{（登）}童佛、間^{（間）}并列城池、或曰、金城湯池也。」漢書^{（漢書）}蒯通傳に「必將嬰^{（嬰）}城、固守皆爲^{（爲）}金城湯池、不可改也。」

【須彌】 シユミ。須彌山。梵語 Sumeru 妙高山の義。佛經にいふ山の名。大海の中に在つて金輪の上に據り、日月これによりて回り、

諸天これによりて居る。高さ八萬四千由旬で縦横もまた同じである。中央に須彌海があつて、その幅四萬由旬長さ十六萬由旬であるといふ。釋氏要覽に「長阿含並起世因本經等云、四州地心、須彌山、梵音正云^{（云）}蘇迷盧、此名^{（名）}妙高山、山有^{（有）}八山、邊^{（邊）}外有^{（有）}大鐵圍山、周圍圍繞並一日月回轉、照^{（照）}四天下、名^{（名）}一國土。」

「須彌より重き」とは「山より重き」といふに同じである。

【御遺命】 ゴユキメイと訓む。

【いすかの嘴とくひちがひ】 物事がくひちがつて、思ふまゝにならぬこと。鷗の嘴のくひちがつてゐるに喩へていふ。吾吟我集に「わが中は離れもやらず合ひもせず、いすかのはし

り、天壽院殿と號する。

【東西不和の導火】 火薬を爆發せしめるために點する火のやうに、東國江戸の徳川と西國大阪の豊臣家の間柄の悪くなる動機となつたこと。「導火」はミチビと訓む。導火線の略。線に火薬を込めたもの。關

【毘盧舍那佛】 ビルシヤナブツ。佛語。梵語。(Vairocana) 舍^{（舍）}に遮^{（遮）}に作る。光明遍照の義。

眞如法身又は大日如來の稱。徧一切處とも譯する。即ち煩惱の體淨く衆徳悉く備り、身土相稱ひ、一切處に徧きこと日光の照さない處のないやうな意。

【大慈大悲】 佛敎の語。廣大無邊なる慈悲。能く他に樂を與ふるを慈といひ、他の善を拔

の音をのみぞきく。「冥途の飛脚に」とやせんかくやしやうげ鳥、いすかの嘴とくひちがひ、心を知らぬぞ是非もなき。鷗は燕雀類中すずめ科に屬する鳥。雀大であつて體色は茶色を帯び、嘴は交叉して、巧に松實の内部にある種子を取つて食ふ。故に交喙とも書く。

【兩家を繋ぐ絆】 豊臣・徳川兩家の關係の深くなるやうに繋ぎつけるもの。絆はホダシ又はキヅナ。元來馬の脚を繋ぐ繩である。

【千姫君】 センヒメギミ。徳川秀忠の長女。母は崇源夫人。慶長二年四月生れ、同八年七月豊臣秀頼に嫁ぐ。大阪陥落の後、元和三年九月、本多忠朝に再嫁した。世に竹橋御殿といふ。寛文六年二月逝去。小石川傳通院に葬

くのを悲といふ。法華經に「大慈大悲常无懈倦。」

【お家とこしなへに康かれと祝ひし文字】

初め秀吉は京都東山に丈六の佛像を造つたが、木造で慶長元年の地震に崩解したから、秀頼は秀吉の遺志を繼いで、十五年六月に工を起し、片桐且元を奉行とし、家康の指圖に任せ、京都所司代板倉勝重と議つて工事を督せしめ、十七年に至つて竣工した。十九年三月又鐘を鑄造し、南禅寺の清韓に命じてその銘を撰せしめたのに、その銘文に「國家安康」の句を入れた。このことをいふのである。

【降つて沸いたる難題】

天より降り、地より涌いたやうな意外の難題。慶長十九年八月

三日を期して、大佛開眼及び大佛殿供養を修せようとし、家康の同意を得て準備既に成つた。然るに期に先だつこと十日、家康その鐘銘に「國家安康」の句のあることを難じて自己を呪詛するものとし、上梁榜も舊例に違ふとてこれを排し、七月二十六日駿府から急使を京都に派し、勝重をして兩供養停止を且元に傳へしめた。二十九日命令が大阪に達し、上下周章紛擾を極めた。且元はこれを以て自己の不文に因るものとし、責を負うて辯明したが、家康は敢て聽かず、更に五山の僧徒に命じて審議せしめた。然るに妙心寺の海山を除く外僧徒はみな清韓を妬む餘、家康に阿附してその解釋に雷同した。そこで且元は清韓を

伴つて、駿府に到つて辯疏しようとしたの

に、清韓は獄に投ぜられ、且元は詰責に逢うて辯難大に力め、遂に一策を畫し、淀殿を東下せしめて、東西の平和を計らしめる事として西に歸つた。時に淀殿も亦侍女を遣して、家康に謝せしめたのに、家康はその使を優遇したから、喜びてかへつて、家康の他意なきを報ずると共に、且元の秘計を悟らず、これを以て君を賣るものと報じた。且元はこの使に後れてかへつたが、大阪の城中はみな且元を疑つて、關東のために計るものとして、遂にこれを殺さうとするやうになつた。因つて且元はその邑茨木に走つた。

【前門の虎】

纔に一禍をのがれて、又禍に逢

ふをいふ。故事瓊林に、「禍去禍又至、曰前門拒虎、後門進狼。」註、漢和帝年方十四、乃能收寶氏。足繼孝昭之烈、惜其與宦官鄭衆謀之、以啓中常侍亡漢之階、胡致堂曰、寶氏雖除、而寺人之權、從茲盛矣、諺云、前門拒虎、後門進狼、此之謂與。」

【後に】

シリへにと訓む。

【不慮の豺狼】 おもひがけのない禍。豺はヤマイヌ、狼はオホカミ。猛獸であつて害悪を逞しうするにより、害禍に譬へていふ。

【仕宜】 シギ。仕義が正しい。事のありさま。次第がら。なりゆき。因圖

【不肖】 不才の人をいふ。自分を謙稱していふ。不肖の義に種々あるけれども、人は父の

生ずる所、故に父に似ないのを不肖といふ説が稍近い。中庸に「賢者過之、不肖者不及也。」史記五帝記に「堯知子丹朱之不肖、不足授天下。」

【姑息因循】 姑息は姑くの安を偷む事。一時の間に合せ。一寸のがれ。因循は古い習慣に因り循つて行ふ事。

【關東の民にかゝり】 徳川氏の詭計に陥る。「わな」はもと繩を輪狀にし、禽獸の脚にかけて、縛つてこれを捕へるもの。古事記に「菟田のたかきに、しぎわなはる、わがまつや、しぎはさやらず。」これより轉じて詭計を用ひて、他をあやなすことをわなにかけるといふ。

【不臣の罪】 臣たる道にそむく罪。(一)故らに君をして不利の地位に陥れるもの。(二)君のためを圖り、その結果却て君の不利となるものである。本文は(二)の意味であつて、寧ろ謙辭に近い。

【不覺の涙】 すずろに出る涙。覺えず知らずにかぼす涙。因國文選の悼亡詩に「撫衿長歎息、不覺淚沾胸。」

【不覺の至り】 不覺は不覺悟の略。覺悟のたしかならぬ事。

【長門守】 木村長門守重成。重茲の子。父が罪を得て自殺した時は、重成は生れたばかりであつたが、乳母が抱いて近江にかくれて僅かに免れ得た。長じて秀頼に仕へ、長門守と

づかはし。因國こゝは(一)

【殘霧つんざき】 消え残る朝霧の中をついて出ること。倭訓栞に「つんざく、撃をよめり。爪裂の義なり。驚もよめり。」俚言集覽に「撃、(錦繡段)巨靈一夜撃山開。」

【一散に】 ひたすらにいそいで。俚言集覽に「一三、馬を走る詞、早道一三。逸散、馬の奔りの疾きを云ふ。(蘆名家記)一足も退かず、一さんに敵陣へ馳入つて。」

【汗馬に宙を走り來る】 馬が疾走すると汗する、故に汗馬は疾走する馬をいふ。その馬にのり、宙を飛んで走り來る。徐俳に「汗馬躍銀鞍。」戰國策に「里數雖多、不費汗馬之勞。」又馬に乗りて戰場に奔走する事。史記の

稱した。大阪の冬の陣片原町に出で進戦し、佐竹義宜の先鋒澁江内膳を得、大に佐竹氏を破り退いて柵を保つた。東軍は皆その遠謀勇略に驚いた。秀忠大に感賞した。夏陣の時先鋒となつて、河内若江に陣して井伊直孝の軍を衝き、奮戦して死んだ。時に年二十。重成は容姿がすぐれ、沈勇であつた。又軍事に長じてゐた。若江の戦、固より死を期し、豫め伽羅を焼いて頭髮に熏じたといふ。家康の實檢に入つた時も、猶香氣が馥郁としてゐた。家康は深くその用意を嘆賞したといふ。(二二二五—二二七五)

【心元なし】 (一)心いらだつ。じれつたし。まうちどほし。(二)覺束なし。不安心なり。き

蕭相國世家に「蕭何未嘗有汗馬之勞。」「中」は多く「宙」に作る。「宙を走る」とは、馬足が地につかち、空中を走り来るやうなことをいふ。

【くつわづら】 たづなに同じ。因國倭訓栞に「くつわづら、倭名抄に響をよみ、俗にくつわといふと見えたり。新撰字鏡に勒又靶をもよめり。口輪連の義成べし。今いふ手綱也といへり。貞丈隨筆に「くつわづらと云ふは口脇繩なり。」

【右手】 メテ。倭訓栞に「めて、東鑑に馬手と書けり弓手に對していふ詞也。」

【豊臣の御社稷】 トヨトミのオンシヤシヨク。社は土地の神、稷は穀の神、國土は穀に

資つて人を養ふから、天子諸侯など國を治めるもの、最も重んずる所、轉じて國家の義に用ひる。本文は豊臣の御時世といふやうな意。孝經に「保其社稷、而和其民人、蓋諸侯之孝也。」淮南子に「身死、人手、社稷爲城。」禮記に「有臣柳莊者、非寡人之臣也、社稷之臣也。」

【棟梁】、屋の背柱を棟といひ、棟を負ふを梁といふ。共に家居に重要な意から、一國又は一家の重任にあたる人をいふ。南史の陸凱傳に「宰相之門、豫章柝柏、雖小已有棟梁之器。」

【足下】 ソコモトと訓む。

【佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け云

々々】 佞人讒者とは主として大野治長をさす。又淀君の命を以て駿府に赴き、家康に謁した大藏尼・正榮の二姫も「且元二心を懷きて君を賣り、以て功をせんと欲するものなり。」といつてゐるから、大阪に歸つて後、必ずや淀君に己の意見を述べたのであらう。これ等の人も毒舌者に加ふべきであらうか。二姫歸つて後、淀君は大に怒り、大野治長と謀つて、且元を殺さうとしたのは、逆臣の汚名を受けた證據である。

【御母公】 オンハ、ギミ。秀頼の生母淀君。【御嫌疑蒙り】 うたがはれること。或は然らんと推測せられること。禮記に「所、以定親疏、決嫌疑、別同異、明是非也。」

【お表】 幕府又は諸侯の政治を行ふ所。こゝは大阪城。

【織田入道殿】 織田信雄常眞入道。織田信長の第二子。北畠具教の嗣となり北畠氏を冒す。信長の薨後三法師を後見したが、弟信孝と和せず、遂にこれを攻め殺した。秀吉の信雄を亡さうとしたとき、家康の援を得て小牧に勝ち後和睦した。これより秀吉に従ひ小田原征伐に功があつた。秀吉の命に忤つて那須に放たれ、薙髮して常眞と號し、二萬石を食んでゐた。ついで秋田に移され、後赦されて伊勢に居り、秀吉が征韓を企てたとき、接伴衆となつて傍に侍した。その後石田三成に投じて、家康と戦つた。亂平いで宥された。既

にして、淀君が己を害せようとする由を聞いて、京都に遁れた。元和元年七月松山に封ぜられた。寛永七年四月薨じた。年七十三。(二二一八―二二九〇)

【御母公の威を笠に被る大野・渡邊】 「笠に被る」とは諺にいふ所、他人の威勢を借りること。「虎の威をかる狐」と同義。大野とは治長をいひ、渡邊とは正榮の子、渡邊尙をいふのであらう。

【我意暴慢】 我意とはわが思ふまゝ。わがまゝ。俚言集覽に「我意、我意を張、我意に任す」など云。「倭訓栞」に「ガイニマカス、神代口訣・職原抄などに任ニ雅意」と書く。埃囊抄に雅は素也といへり。雅意の字は蕭望之傳に出

たり。俗にガイニスルがいをふるまふなどいへり。我意と書も通ぜり。暴は粗厲、慢は放肆。論語泰伯篇に「動ニ容貌、斯遠ニ暴慢ニ矣。」【貴殿が日ごろの教訓】 あなた(片桐且元)の常々の教へ。日ごろは俚言集覽に「日頃、素也、常々也。」

【冤】 エン。冤罪。無實の罪。

【いしくも】 殊勝にも。因國倭訓栞に「いしく日本紀に不能致果をいしきなきことよめり。左傳に致果爲殺と見ゆ。いみじきの略なるべし雲井の春に關白大臣いしく見證に参りたまひ又管領右京大夫勝元いしく人々などの膝をまじへて見たてまつると見え、今昔物語に何につけてもいしかる物の上手かな

と見えたり。くあ反か、かる反く也。或はいしくもさふらふ。いしくものたまふなど見ゆ。」

【堪忍】 こらへしのおこと。魏史に「洪之志性慷慨、多所堪忍。」諺に「ならぬ堪忍するが堪忍。」東照公遺訓に「堪忍は無事長久の基。」

【鼠輩】 鼠輩の如きものなども。いやしきものども。人を卑しめ罵る辭。魏志華陀傳に「大祖曰不愛天下當無此鼠輩耶。」舊唐書李宗閔揚嗣復傳に「捨彼鴻狎茲鼠輩。」

【遺恨骨髓に徹す】 深く怨み思ふこと。史

記秦本紀に「繆公之怨此三人、入於骨髓。」【破綻】 ハタン。綻は衣の縫ひ目の解ける

義、ホコロブと訓する。破綻と熟して破裂と同じく事の圓滿に行かないで破れること。

【去就】 彼を去つてこれにつく事。

【京表】 表は處・許の義。

【うたかた】 空形の轉か。水の上の泡。泡の消えやすいことから、はかない事に譬へていふ。【圓圖】こゝでは水泡に歸して無功となつたこと。方丈記に、「ながれにうかぶうたかたの、かつきえかつむすびて、ひさしくとどまることなし。」後撰集、「降りやめば跡だに見えぬうたかたの、消えてはかなきよを頼む哉。」

【まつた】 また。

【して】 さうして。而して。

【九度山】 クドヤマ。山名でなく村名である。

紀伊國伊都郡高野山の北谷にある。大字に九度山・慈尊院・古澤等がある。本文に眞田幸村の事がある。九度山にある善名稱院は眞田昌幸竝に幸村閉居の地。昌幸はこゝで死んだ。幸村も亦討死の後、土人がこゝに石像を建てた。有名な眞田紐は、眞田氏の閉居の時、こゝで創製したもの。

【信州上田】 信濃國小縣郡にある。長野市の東南十里五町、もと松平氏五萬三千石の舊城下その城は眞田氏の創築。慶長五年關原役に眞田昌幸はこゝに居つて秀忠の軍を支へた。この地は高崎・直江津間の鐵道が通過し、蠶業が盛であつて絹織物の産が多く、殊に上田袖の名が著れてゐる。

【眞田安房守】 昌幸。幸隆の子。武田信玄に従ひ、勝頼の死後は信長に降つた。信長の薨後上杉に通じ、北條に屬し更に徳川に従ひ遂に秀吉に歸した。關原役には上田に據つて秀忠の軍を阻み、關原に會することの出来ないやうにした。役後紀伊に放たれ、慶長十三年歿。(二一八一—二二四五)

【左衛門佐幸村】 昌幸の次子。秀吉に仕へた。關原役兄信之、(又信幸に作る)と別れ、父と共に西軍に屬し、敗後紀伊國九度山に潛んだ。慶長十九年大阪の役秀頼の召に應じ、奇計を以て屢東軍を破つた。翌元和元年夏の役、奮戦して伊達政宗を破り、東軍を夾撃しようとした。計が齟齬して軍機振はず。遂に

越人西尾久作に撃たれた。(二二三〇—二二三七五)

【良軍師】 よき軍師。軍師とは主將に附屬して、軍機を掌り、謀計を運らす人をいふ。

【關ヶ原の一戦】 慶長五年九月、美濃關ヶ原に於ける石田三成對徳川家康の戦争。三成は秀吉の薨後家康の勢の日に熾なるを見て、これを除かうと思ひ、家康が會津征討の途に上つたとき、秀頼の命を矯めて、諸侯を糾合して家康を討つた。その兵十八萬。家康は直に軍を施して西進した。その兵九萬兩軍が關原に會して、激戦數刻で三成は遂に敗績し、行長等と捕斬せられ、與黨の諸侯は逃れ奔つて、徳川氏の覇業がこゝで出來た。

【跋扈】 バツコ。わがまゝに振舞ふこと。扈

は竹籬なり、水の未だ至らざる時に豫め竹籬を作つて魚を俟ち、魚が入りて水が退く、小魚だけ留まつて、大なる者は籬扈を跳蹴して脱れ去るからいふのである。後漢書梁冀傳に

「梁冀字伯卓、爲人鸞肩豺目、洞精矚眦、拜大將軍、侈暴滋甚、冲帝崩、冀立質帝、少聳慧、知冀驕横、嘗朝群臣目冀曰、此跋扈將軍也、冀聞惡之遂鳩殺。」

【蟄して】 チツして。隠れ籠り居る事。蟄は字典「藏也。靜也。藏伏靜處也。」

【上使】 將軍から諸侯に賜はる使をいふ。上使には老中又は奏者番高家・御小姓・御使番等の別がある。これを受ける諸侯の家の格式

によつて、使の身分も一樣でない。

【浪々】 さまよひあるくさま。又おちぶれること。流浪又牢浪などともいふ。楚辭に「雷余襟之浪々。」

【長曾我部盛親】 チャウソカベモリチカ。

元親の第四子。初宇右衛門太郎、後新井右衛門と改め、宮内少輔と稱した。父についで土佐を領した。關原の役に石田三成に黨し、敗れて封を失ひ剃髮して京師に居たが、慶長十九年秀頼の招に應じて大阪城に入った。翌元和元年東軍の先鋒藤堂高虎を破つたが、後敗れて擒となり、六條磔で斬られた。年四十餘。(一二二七五)

【黒田家】 宇多源氏、佐々木秀義の五代京極

滿信二男宗清、近江國伊香郡黒田邑に住してゐたので氏とした。六世黒田高政は近江の守護佐々木高頼及びその子氏綱に屬した。その孫職隆が初めて小寺氏を稱した。その子孝高は初め織田信長に屬し、後に秀吉に従つた。天正十年明智光秀を討つて功があり、十四年黒田氏に復した。十五年筑紫の陣に功があつて、豊前國六郡を賜はつた。十七年その四男長政が封を襲いで甲斐守に任じ、秀吉の薨後徳川家康に仕へ、關原役に勳功があつた。慶長五年十月筑前國を賜ひ五十二萬三千石餘を領し、福岡城に住した。子孫相襲いで明治に至り、侯爵を授けられた。本文當時の黒田家は長政の時である。

【浪人】 一定の勤先のないもの。流浪する人。主に昔時諸侯に仕へてゐたのが、家祿を離れたのをいふ。柳宗元の李赤傳に「李赤江湖間浪人也。」蘇軾の詩に「我本放浪人、家寄西南坤。」

【後藤又兵衛基次】 幼時から黒田孝高及び長政に仕へて、屢軍功があり、小熊本主となつたが、去つて諸國に流浪し、遂に秀頼の招きに應じて、慶長十八年大阪役に奮戦して死んだ。(一二二七四)

【かねてちなみはつけおきたり】 因縁は結んで置いた。

【御上使】 上御使とあるが正しい。カミミツカヒと訓む。「上」カミ。ウヘ。ジャウ。シヤ

ウ。主上、將軍。公方。貴人、又その内室にもいふ。廣韻に「上、君也、太上極尊之稱。」蔡邕獨斷に「上者尊位所在但言上不三敢言尊號。」源氏物語帶木に「かみ俄かといわれど、きゝいれず。」

【手配】 テクバリ。又テハイ。テワケ。事を行ふに、それぞれの備へをなすこと。漢語の部署に當る。

【地利】 地勢が險阻で城池が堅固で要害のよいこと。孟子公孫丑下に「天時不如地利、地利不如人和。」

【出丸】 出城に同じ。本城に附屬し、別に離れて築いた城。漢語の別壘。俚言集覽に「出丸、出城をいふ。大阪の出城に眞田丸あり。」

丸とは元來城郭の内部をいふのであるから、城の字と同様に用ひられ、本城を本丸、外城を二の丸、月城を三の丸等といふのである。

【紀州川】 紀の川。紀伊國にある。大和の吉野川の下流であつて、一に紀伊川ともいふ。大和國五條から西流して、紀伊國伊都郡に入り、那賀・海草兩郡を西流して、和歌山灣に注ぐ。流域三十里、下流から十三里舟楫の便がある。その河口は即ち和歌山港であつて、小汽船の碇泊に便利である。

【浪速津】 浪華津・難波津・浪花津とも書く。今の大阪地方の古名。浪華大津ともいふ。神武紀に「戊午年春二月丁酉朔丁未皇師遂東、舳艫相接、方到難波之崎、會有奔潮、大急

阪城に籠つた。それで越前侯忠直は大に怒つて、その首を五千石で購つたといふことである。

【和久】 ワク。名は宗是、もと豊臣秀吉の書佐であつた。仙臺侯と仲が善いので、のち仙臺に寓したとき、客禮を以て遇せられ、こゝに居つて將に身を終へようとしたが、大阪の役の起るに及んで、再び大阪に歸り、城中に入らうとして入ることが出来ず、遂に東軍に躍り入つて奮戦して死んだ。時に年八十一。時の人は稱して齋藤實盛の遺風があるといつたといふことである。

【命はもとより鴻毛の】 鴻毛はおほ鳥の毛。非常に軽い。命は大切なものであるけれども、

田以名爲浪速國、亦曰浪華、今謂難波一訛。」

【御出費】 オンイリメと訓む。

【若干】 ソコバクと訓む。

【糧米】 ラウマイと訓む。

【兵具】 ヒヤウグ。武器。

【ときんば】 時にはの音便。語中に強く念を押した氣分が含まれてゐる。

【關東の老奸雄】 家康の事。奸雄は奸智ある英雄。

【速水】 ハヤミ。名は守久、秀吉の遺命によつて、秀頼守護の七隊長の一人である。

【御宿】 ミシユク。名は正倫。父名は友綱、監物と號す。元は武田家の臣、後北條氏に仕へた。正倫越前に仕へたが、大阪陣の時に大

ども、義の爲には固より鴻毛より軽く見るべきだといふこと。司馬遷報任小卿書に「人固有二死、死或重於泰山、或輕於鴻毛、用之所謂趨異也。」

【祖先佐々木が四つ目結】 四つ目結は近江源氏佐々木一流の紋章である。この紋は源三秀義の孫、近江守信綱の時から、子孫に相傳したものである。楯形を四つ並べて正四角をなしたものの。「四つ目結」ヨツメユヒ。

【金石も亦透り】 人は熱心になると、如何なることでも成就するといふ意。朱子の語に「陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成。」

【往時】 インジと訓む。

【社鼠】 シヤソ。社に巢くふ鼠の義。君側の

小人に譬へていふ語。晏子「景公問曰治國何患。晏子對曰、患夫社鼠。」(因國)

【地の利はあれども人の和なく】大阪は流石に豊公の經營した城であるから、地利に於ては遺憾はないけれども、諸將は多くは心を離して一致せないから、所謂人の和がないといふのである。

【御發明】賢く物を考へ分くること。さかしきこと。りころ。(因國)

【民草】タミグサ。民のつきつきに蕃息するさまを、草にたとへていふ語。あをひとぐさ。(因國)倭訓栞に「たみくさ、民種なり、それを歌に草の義にとりて、民の草葉民の千草などよめる也。」續千載集卷第二十、賀歌實治の百

首の歌奉りける時、秋田、前大納言基良一風わたる民の草葉も年あれば、君にぞなびく千代の秋まで。」

【天の時】時日・支干・孤虚・旺相の屬をいふ又自然にめぐり來た時。

【大御所】將軍の父の尊稱、及びその住所。

(因國)本文は家康を指す。吾妻鏡建仁三年九月六日の條に「江間殿折節被_レ候大御所云々。」とあるは住居を指し、難太平記に「其頃大御所は東寺の御陣也云々。」明德記に「大御所尊氏將軍御代を被召て既に六十年云々。」とあるは、その人を指せるなり。

【ちのづからなる徳風に、いつしか靡く】自然にそなはれる徳になびく。書經 君陳に

「爾維風、下民維草。論語顔淵篇に「君子之徳風、小人徳草、草上之風必偃。」

【東天紅】トウテンコウ。曉の鶏の聲調にいふ語。(因國)字義からいふと、東方の空が紅になつて、日が將に出ようとすること。

【八面】ヤモ。四方八方を四面八面といふ。ことばのはやしに「八面、かなたこなた。む

感想

参考資料として高須芳次郎氏の批評を掲げる。逍遙は曩に史劇論を「早稲田文學」に發表して、巢林子・默阿彌・學海・櫻痴らの史劇に於ける缺點を擧げ、「史劇の本質は、個々人物の性格を因とし、境遇を縁とし、此の因縁によつて成つた著大な業果を描いて人事の真相を現はすべきである。」と唱へた。勿論、逍遙は、在來の夢幻劇は其の儘に保存して置いて、別に新史劇を書いて時代の要求に應ずべきことを力説したのである。そして其の説を裏書するために、「桐一葉」を書いた。

逍遙は、平生シェークスピアに親炙し、且つイギリスに於ける諸戯曲にも通じて居たところから、そ

きむき。めぐり。」とある。

【愚痴にをちかた寺】互に言ふことの兎角愚痴に陥ることをほのめかして、遠寺の鐘聲にいひ續けたのである。

【ほのぼの】(一)かすか。ちらちら。ほのか。ほんのり。うすうす。(二)夜の明け方。しのめ。黎明。(因國)

れらに於て得たところを活用し、更に自家の新詩想をも加味して、史劇革新の典型を示すべき大きい抱負の下に『桐一葉』を書いたのであらう。私は曾て『桐一葉』を評して、「單なるレエゼドラマとしてよりは、主として實演を豫期して書いた新史劇である」それで一面に於ては、實演に適するやう舊劇の美所を攝取し、他面に於ては、在來の悲劇的制約に囚はれないで、殆ど新しい思想と新しい史的解釋を具現するに力めた。こゝに逍遙の人知れぬ苦心があつた。若し『桐一葉』を單なるレエゼドラマとして自由に書くならば、もつと大膽に、自由に書けたであらうけれども、一方實演を豫想する以上は、一概に舊劇の美點を無視することが出来なかつた。それがため史劇製作上の自由を大分束縛せらるべき不便さが附纏つて居たであらう。のみならず、『桐一葉』が出た頃は、劇界に於ける情弊が幾重にも作者を取巻いて居て、文壇との交渉が殆どなかつたのであるから、新史劇を書くには相當の自信と、勇氣と、周到な用意とがなければならなかつた。『桐一葉』には優れた點がいろ／＼ある。それについて衆評一致した點は、性格表現に於て略、成功した事、場面の配合宜しき事、臺詞其の他の詞句が藝術味に豊かな事などである。が、其の最も優れた點は、片桐且元を中心としての、理智的悲劇の構成にある。高山樗牛は『桐一葉』について、「著者はすべて悲劇の形式に餘り注意しなかつたやうだ。故に一齣一場の興味は津々として居るが、全篇を通じて見ると、情が淺くて感が薄い。」と云つた

のは、シルレルの「ワレンスタイン」に共鳴した彼として無理でないが、『桐一葉』はさうした華やかな悲劇たることを避けて、寧ろ地味な理智中心の悲劇を作つたのである。それは感動させる劇でなくて、考へさせる劇である。甘い涙を促がす劇でなくて、苦い涙を誘ひ出す劇である。それで『桐一葉』は在來の悲劇のやうに、誰の心をも情熱的に突き動かすやうな力には乏しいかも知れぬ。けれども、理智の悲劇をちつと味ふものには、深い感銘を與へて、淋しい人生の一角を考へさせる。そこに『桐一葉』の特色がある」と私は述べた。

それから私は『桐一葉』の人物の性格及び場面と言及して、「性格描寫の上に於て複雑な内容を有する淀君の面目が一番鮮かに描かれて居ることは、衆評の一致するところである。且元の性格は複雑と云ふよりも、寧ろ餘り類のない性格であるために是非の評が定らぬ。見やうによつては失敗とも云へよう。樗牛のやうに『悲壯英雄の佛がない』とも評することが出来よう。が、善意に解すると、逍遙の視ひ處は、且元を非英雄的な人、地味な理智の人、懷疑的な人、意力の弱い人として表現しようとした點にあるのでなかつたか。さうしたところに、私らに考へさせる或物を與へたのではなかつたか。たとひ、性格描寫の上に躓いた點があるにもせよ、そこに新味がある。新意義がある。さて場面に於いては、長柄堤の場を以て壓巻とする。櫻狩の場から淀君狂亂の場に變るところも、目先が變つて興

が深い。長柄堤は抒情味が深く、餘韻が長く残るやうな趣がある。要するに、逍遙がこれほどに新史劇を取纏めて、劃期的な足跡を劇文學の上に印したのは、過渡期の傑作として重視せらるゝ所以であつた。」と私は推定した。大體に於て此の終へは、今も同じである。

『孤城落日』は、片桐且元の末路を中心として、豊臣家の滅亡を描いた三幕七場の史劇である。それは『桐一葉』の續篇とも見られる。「桐一葉」ほどに力が這入つて居ないけれども、全篇がよく纏つて非難の少ない作である。(日本現代文學十二講)

二七 萩 大名

出 所

【狂言記】 狂言の詞章を集めたもの。正、續、拾遺、外篇各五卷、(各卷十曲づつ)ある。

要 旨

室町時代文學の特色は能と狂言とに於て見ることが出来る。狂言は室町時代に於て能樂に伴つて發達し、能が悲愴な色彩を帯び、飽くまで嚴肅なのに對して、終始滑稽諧謔を弄し失策を演ずる。狂言は本來、能の幕の切れ目をつなぎ脚色の單調を防ぐ爲めに「間の狂言」を入れ滑稽な所作事をせるより始まつたもので、悲劇としての能と、喜劇としての、狂言とこの兩者が相俟つて複雑な人世相を示し、その兩面を穿つた趣を見せるのである。當時の風俗、習慣、言語等を窺はせたいものである。

解 釋

【狂言】 狂言は謡曲が猿樂の能として演ぜられる間に演ぜられたものであつて、謡曲との

間に著しき相違を示してゐる。謡曲は從來の古典文學を集成したものであつて、その詞は華麗であり、その内容は神祕的宗教的であり全體に嚴肅な氣分がただよつてゐるが、狂言は舊文學の傳統から離れて新しい詞と内容とから成つてゐる。即ち言語も室町時代の口語を用ひて居り、その描く所も室町時代の世相の上に立つてゐる。傳統的な權威と、新しく起つて來たものとの衝突葛藤といふ様な題材を扱つてそこに滑稽な氣分がただよつて居るのである。而して狂言の今日存するものは狂言記・續狂言記・拾遺狂言記によつてそれぞれ五十番づゝ合せて百五十番と外に狂言記外五十番に載せられてあるものによつて合せて

二百番になる。その流派には大藏流・鶯流・和泉流の三流あるが、最も勢力あるは和泉流である。

是等の狂言は内容から分類すると、

- 一、祝賀に關するもの：(例―惠比壽・大黒・三人百姓・福壽萬歳)
- 二、鬼神閻魔等：(例―朝比奈・神鳴・首引)
- 三、大名：(例―鞭猿・萩大名・鼻取相撲)
- 四、僧侶：(例―昆布施・宗論・大般若)
- 五、山伏：(例―柿山伏・腰祈・苞山伏)
- 六、掣取夫婦：(例―鷄掣・算勘掣・水論掣)
- 七、片輪者：(例―不聞座頭・三人片輪・井碓)
- 八、盗人：(例―連歌盗人・子盗人・瓜盗人)
- 九、遊興：(例―茶壺・八句連歌)

一〇、謡曲に擬したもの：(例―樂阿彌・祐善・通圓)

大體右の様になるが、演ずる上から見ると脇狂言と二番目狂言と雜狂言とに分けてある。脇狂言には祝賀の意のあるものを用ひ、末廣がり、寶の槌等はその例である。二番目狂言には大名物などを主とし、文相撲・墨塗・二人大名、本課の萩大名の如きその例である。雜狂言は種々の題材を扱つてあり、その番數は最も多い。(藤村作氏、國文學史總説による)

【大名】 ダイミヤウ。王朝時代には名田ミヤウヂを多く領有したる者をいひ、武家時代には多大の地を領有せる武士をいひ、江戸時代には幕府に直隸せる萬石以上の土地を領したるもの

通稱にして制度上における稱呼にはあらず、

なほ大名に對して名田を少く有するもの、又は領有の地の些少なるものを小名といひ、大名小名を總稱して同じく大名ともいふ。大名はまた諸侯とも稱す。[國史]

【冠者】 クワンジャ。(一)元服して冠したる少年。(くわじや、くわんざ)(二)無官にして六位の人。[廣]こゝでは若者の意。

【遊山】 ユサン。(一)山に遊ぶこと。(二)單に遊びに行くこと。こゝは(二)

【あるかやい】 居るか、おいの意。

【御前に】 オンマへに。はいこゝに居りますの意。

【上げう】 上げよう。上げむの轉。

【やさかたな】 優雅な。

【なるまいわい】 できまい。駄目だらう。

【句づくろひ】 和歌などの句を推敲してねりつくるふこと。【廣翻】

【とよ】 十重の轉と、豊とをかけたのである。豊は(一)物の足らひ豊かなるを稱ふる語、(二)五穀の多くみること、豊年。【廣翻】

【忘れさつしやれて】 忘れなされて。

【覚えうす】 覚えむとすの約轉。

【折檻】 セツカン。漢の朱雲が孝成帝に佞臣張禹を斬らんと請ひし際、帝怒りて御史をして雲を殿上より引き下さしむるや、雲は殿上の檻にとりつきて動かす、檻ために折れたりといふ故事、漢書に出づ。甚しく責むるこ

といたく意見を加ふること。【廣翻】

漢書朱雲傳「成帝時張禹以帝師、位特進、甚尊重、雲上書求見、公卿在前、雲曰、今朝廷大臣、上不能匡主、下亡以益民、皆尸位素餐、臣願賜尙方斬馬劍、斷佞臣一人、以厲其餘。下問也、對曰、安昌侯張禹。上大怒曰、小臣居下、訕上、廷辱師傅、罪死不赦、御史將雲下。雲攀殿檻、折、呼曰、臣得下從龍逢比干、遊於地下、足矣。未知聖朝何如一耳。後當治檻、上曰、勿易。因而鞫之、以旌直臣、雲自後不復仕。」

【とつとござりました】 疾くとその家がござりました。早や参りました。

【御亭】 御亭主、御主人。

【頼うだ人】 頼むだ人で、頼りにする人。仕へてゐる人。

【いかう】 いかくの訛。嚴しは、(一)いかめし、おごそかなり(二)あらし、たけし。(三)はなはだし、多し。(四)たいさうなり【廣翻】こゝでは(四)の意、たいへん。

【むさう】 むさくの轉、不潔にして不快なり。きたならし。

狂言の文學史的價値

狂言は樂天的なる我國民性の反影としての在來文學作品中、最も雄大なる産物なり。元來我國民は快活無邪氣にして、甚しく笑顔よしなりしなり。今日に在りても外人の外くは日本人の快活をいふ。……こは蓋し神代ながらの國民性の發現なり。此笑顔よしの國民が佛教に泣くことを教へられ、儒教に眞面目を強ひられて、天性の笑ひを押へしもの、是奈良平安の朝にして平安朝の末頃より漸次又其本性を發揮し、始めて俳諧歌に笑ひ、次に連歌に笑ひ、終に狂言に笑ふに至る。俳諧歌は國民の忍び

【おぢやらぬいの】 ござらぬわいの。

【なか〜】 狂言に用ひられた場合には、さう、左様の意。肯定する場合に。

【出来たて〜】 出来たといつて。

【白臚に鼻の先】 臚と鼻に萩と花とを通はした。

【とつとう】 疾くとかとの意。早く。

笑ひなり。連歌は國民のクス／＼笑ひなり。そのゲラ／＼笑ひ、高笑ひとなりしもの即ち狂言なり。唯それ當代生民塗炭の苦を嘗めて、天真の無邪氣を缺き、故意にサルヂニアの毒草をなめて笑ふが如き、發作的、神經質的なるを遺憾とす。更に、又、其用語が悉く當時の口語にて、たのうだ人と云ひ、ござる（おぢやる）と云ひ、やるまいぞ、おりやるまい、なか／＼など云へるは、言語學史上、時代文典編輯上、無二の資料といふべく、平民文學、喜劇文學、諷刺文學の濫觴として、其價值侮るべからざるものあり。今日普通に行はるゝ口上茶番や、にわか、語呂合はせなどにて、

こゝな銚子を一寸かりて、阿呆が調子にのるといふや

抽々ちよくちよく徳利とおあがり下さいあらはれいでたる、あけてみてしめ（明智光秀）

瓢箪から駒が出る、冗談から暇が出る

の類は、皆、狂言の影響の断片ともいふべく、吾人は今日普通に愛讀せらるゝ滑稽新聞や、何々バウクや、いたづら小僧日記（A Bad Boys Diary）にもまして其趣味なき好笑をよるこぶものなり。此の一點、即ち低級趣味の普及と云ふ方面に於ても、狂言の功はなか／＼に偉大なるものなり。さて現存せる狂言本中、最も廣く分布せるものは、和泉流本なれども、文體の備はれるは大藏流なり。今一つ他に覺流と云ふがあれども、文詞廣く傳はらず。

参考書

狂言に關する書としては、以前狂言記、續狂言記、狂言記拾遺の三本、都合十五冊ありしを、明治三十六年、幸田博士校訂して狂言全集と題し、上中下三卷に輯めしもの最もよろし。和泉流のを本文に出し、毎章附するに六號活字の大藏流文詞を以てしたれば對照にも便利なり。然れども一寸したる参考には、芳賀博士校訂、狂言二十番、大和田建樹狂言評註の方、簡結にして便利なり。其他、有朋堂文庫（第三十一、三十二）、大町桂月氏の狂言記全（學生文庫二二）佐久間信吉氏の新釋狂言記、古谷知新氏の狂言全集等あり。（三浦圭三著、綜合日本文學全史）

希臘の最古のコメデーは、我が狂言と相距ること幾許も異ならざりしならん。然れどもアリストファネスに至りては、已に多くのアクテンを有し、純然たるコメデーの標本を作れり。我が狂言は徳川時代に於ても、遂に發達せる後繼者を見出す能はざりしを遺憾とす。加之、狂言の滑稽はあまりに誇大にして、事實に遠し。事實の誇大は、滑稽としては最も容易き滑稽なり。故を撰つに大長刀を擔ぎ出さば、人誰か之を笑はざらん。狂言の滑稽は率ねこの類なり。發達せるコメデーに於ては、眞摯なる平生の舉動行作の行はるゝ間に、好笑の資料を發見し來らざるべからず。眞面目に戀愛し、眞面目に宗教に熱中する側に於て、滑稽なる事件は生ぜざるべからず。狂言のは最初より滑稽にして、觀者ははじめより滑稽を以て之を迎ふ。故に輕飄にして莊重ならず、諷刺も亦深酷を缺けりといふべし。

——芳賀矢一、「國文學史概論」——

二八七 騎落

出 所

【觀世流謠曲】 謠曲は能樂に用ひる詞曲で、多くは二場物の短篇である。全文が詞と地との二部分から成つてゐて、語句は大體七五調で、古歌、朗詠等の引用多く、掛詞、縁語等で修飾されてゐる。室町時代に發生したもので、爾來武家の式樂として、兼ねて主な娛樂の一として今日まで用ひられて來た。現今傳はつてゐるのは數百番あるが、主として實演されるのは二百番内外である。作者は大部分不明である。その首節の流に觀世（クワンゼ）實生（ホウシヤウ）金剛（コンガウ）喜多（キタ）金春（コンバル）の五派があり、謠本は觀世二百五番、實生二百十番、金剛二百十七番、喜多二百二番、金春百三十番あり、流派により文句、節曲、番組、題名等に多少の相違がある。能に合はさず單獨に歌ふこともある。これを素謠（スウタヒ）といひ、又一曲の全部を歌ふを番謠（バンウタヒ）、一節のみ歌ふを小謠（コウタヒ）といふ。

觀世流は觀阿彌、世阿彌の流を汲んだものをいふ。

要 旨

前課の狂言と共に室町文學の代表的な謠曲とは如何なる者かを知らしめ、同時に史實に依つて武士の情懷を現はしめたい。

脚色と史實

全篇の趣向は源平盛衰記に記せる事實を根據としてゐる。七騎といふことは頼朝敗北して土肥の相山に入つた時、土肥實平・遠平・新開次郎忠氏・土屋三郎宗遠・岡崎四郎義實・藤九郎盛長のみ従つたから、盛長は先祖伊豫守殿、貞任・宗任を攻められた時、僅に七騎で山に籠られたことがあるから、吉例であると祝つたことが見えてゐる。これを轉用したのである。遠平を陸に残すことは、かの乗舟の際に、遠平が、其の養子で妹の實子たる萬壽冠者として兼ねて敵方に預けて置いた者の來るのを待たうといつたのに、實平は怒りて、遠平は敵方に内應するものと思はれると云つて、岡崎義實に遠平を討てよと言つたことを轉用してゐる。謠曲作者が脚色を立てる場合には多く此の類で、多少史上に類似の事蹟あることを仕組んで、巧に補綴したのである。

役割説明

二八七 騎落

シテ 能一番の主人公たる役。仕手の義にて最も主要なる役を仕る役者なるが故に名づく。本篇には土肥次郎實平がシテの役なり。

ツレ(又シテツレ) シテの副となる役。連れの義。源頼朝と従者六人が之なり。

ワキ シテの客となり、相手となり之を助くる役。脇の義。佛像三尊の脇侍などより來りし稱ならん、

本篇にては和田義盛がワキなり。

ワキツレ ワキの副となる役。

トモ 従者となる役。供の義。

子方 少年の勤むる役。こは必ずしも作中の人物が少年なりとの意にあらず、船辨慶又は安宅の義經の如き大人をも、子方とすることあり。本篇にては土肥遠平が子方なり。

狂言 シテ・ワキに屬せず、専ら滑稽的の端役をなすもの、間の狂言、或は單にアヒともいふ。

梗概

源頼朝が石橋山の戦に敗れて、主従七騎眞鶴崎から安房に渡海する船中の事を作つてある。頼朝は主従八騎であるのは不吉の例だとして、一人を船からおろすやうに土肥實平に命じたので、實平は已むを得ず、その子遠平を下船させた、その時の父子生別の悲々を叙し、次で和田義盛が遠平を助けて、

意外にも頼朝の船にめぐりあふことを叙してある。

解釋

【舟は捨小舟云々】 身は捨小舟のやうなもので、不遇を恨んでもどうにも仕方がない。

併し之が憂世といふのであらう。「うらみ」を

「浦」に、「かひ」を「權」にかけてある。玉葉集

「恨みてもかひなき果の今はただ憂きにまかせて見るが悲しき」とある。

【是は云々】 「これは……頼朝と(いふ者)

は我事なり」といふ文脈で「これは」文法上

無用の語であるが謡曲狂言の定つた形式である。

【石橋山の合戦】 治承四年源頼朝、以仁王

の令旨を奉じて義兵を擧げ、北條時政父子と

共に石橋山に陣す。時に相模の住人大庭三郎景親之を襲ひ、頼朝の軍衆寡敵せず、佐那田余一、武藤三郎等之に死す頼朝相山に隠れ土肥實平の謀に依つて辛うじて安房に逃る。

【開かばやと存じ候】 落ちのびたいと存じます。當時武士の間では「にげる」といふことを非常に忌みて「開く」といつた。天國

【開かうずるにてあるぞ】 落ちるといふ

意。落ちるといふ不詳の語を忌んで用ひた言

葉。今の逃げのびる意。開かんとするなどと

同じ。「うずる」は「むとする」の約、「なり」

を「にてあり」と言ふは當時の時代語で口説

「である」の源だ。

【召されうずる】 「召されんとする」で、召されるがよいといふ意。

【さん候】 「さに候」の音便、左様にて候ふと同じ、因圖

【七騎】 前出。源平盛衰記にある。

【祖父爲義云々】 源平盛衰記に、頼朝主従石橋山に破れ、臥木のうつろに隠れた事を記した條に、「御先祖伊豫守殿（頼義）、貞任、宗任を攻められけるに、官兵多く討たれて落給ひけるに、僅に七騎にて山に籠り給ひけり……今日の御有様昔に相違なし、吉例也」とある。

【父義朝江州へ云々】 平治物語に、「義朝の

一所に落ちられけるは、嫡子悪源太義平……僅に八騎なり。」とある。

【せがい】 ふなだな。因圖

【田代殿】 名は信綱。田代冠者といふ。頼朝が伊豆に流された時から仕へてゐた人。

【新開の次郎】 名は荒次郎、實平の甦だと長門本に出てゐる。

【土屋の三郎】 名は宗遠、土肥實平の弟、義經に従ひ平氏を討ち功があつた。

【土佐坊】 名は正尊。土佐坊昌俊を謡曲では正尊といつてある。義經が頼朝と不和であつた時、頼朝の命を受けて堀河に義經を夜襲して敗死した。この事蹟を作つた謡曲「正尊」は頗る有名である。盛衰記には、土佐坊の名

はこゝになく、藤九郎盛長の名がある。謡曲

の作者が、變化の爲に、僧形の者を一人加へたのであらう。

【艦板】 トモイタ。艦を押す處にある踏板。

【義實】 岡崎四郎平義實法師。三浦義明の弟。頼朝の伊豆にゐた時、義實は意を傾けて推舉したので頼朝も亦深く倚信した。次の岡崎殿とあるのは義實のこと。

【龍門原上の土に云々】 白氏文集に「龍門原上土。埋骨不埋名。遺文三十軸。軸々金玉聲。」これは白樂天が、元居敬の遺文三十軸に題した詩で、龍門は居敬を葬つた地。この故事を引いたのは、たとひこゝで命を捨てても君に盡したといふ名は後世に残るといふ心持

を表はしたものであらう。

【下りよと候や】 「下りよと仰せ候や」の略。

【なか／＼のこと】 左様、その通りだの意。

なか／＼を此の意味に用ひたのは當時の時代語。いかにも、さなり。因圖

【一の老體】 第一番の老體。

【陸】 クガ。

【所詮】 ショセン。つまるところ。ひつきやう。

【その謂れは候】 「その謂れは如何に候」の略。

【真田の與一義忠】 岡崎義實の子。剛勇にして多力、能く悍馬を馭す。石橋山の戦に戦死す。俣野との格闘は盛衰記に詳である。

【御分】 ゴブン。そなた。ごへん。廣辭、對稱の代名詞、御身といふに同じ。

【餘の道理に云々】 道理至極なれば再言し給ふな。「な……そ」は禁止の意味を表はす形式。

【御詮】 ゴジャウ。御仰せ。廣辭

【言語道斷】 ゴンゴ・ダウダン。もと妙法を賛歎せる語。後批難の意に轉じ、言語にていひつくされぬこと、即ち以ての外のひがごと。道斷を同斷に作るは非。瓔珞經「言語道斷、心行所滅。」

【人手には掛けまじいぞ】 父が手づから手討にすべしの意。

【下りまじきと申す者を】 「まじき」とは文

法上破格にて「まじと申す」とあるべきところ。室町時代には餘程中古文典が亂れて來てゐる。

【下りようずる】 下りむとする、下りようとする、下りようずると變つて來た。

【かまへて】 必ず。きつと。決して。因圓

【ゆゝしく】 大層けなげな。

【松浦佐用姫が云々】 大伴狹手彦が唐に渡りし時、その妻佐用姫が夫の跡を慕ひて山に登り、船のゆくへをかなしみて領布を振りたりとの故事、その山をひれふり山といふ。

【ひれ伏しし】 ひらたく伏しかがんだ。

【契程なさ早船を】 親子の契（縁）の短きを船の早きにいひかく。

【弱氣を見えじ】 見えじは見られじの意。

此の語法は奈良時代より既に見えてゐる。「いはるゝ」が「いはゆる」になつてゐるのも同一系統の變化である。

【なか／＼に】 このなか／＼は却つての意にて中古語の用法。因圓

【飛立つばかりに思ひ子の】 飛び立つばかりに思ふと「思ひ子」をいひかく。思ひ子とははゆき子、愛子の意。

【弓張月の西の空云々】 弦月の出でたる西の空さして漕ぎゆく船の行方が定まらぬといひて、身の將來の氣づかはしきをいふ。

【休らふ】 休むの延。それより轉じてためらふ、躊躇する意に用ひた。廣辭

【和田小太郎義盛】 義宗の子、豪勇多力、

射をよくす。義經に従ひて義仲を討ち平氏を滅し侍所の別當となる。後北條氏の怨を買ひ爵々として樂しまなかつたが終に兵を擧げて北條氏を討ち敗死した。

【騙つて】 タバカつて。だまし欺いて。

【やがて】 すぐに。因圓

【安堵】 安心するをいふ。堵は牆なり。牆内に安んじ居るの義。史記高祖記に「吏民皆安堵如故。」

【心を盡させられ候云々】 心痛させられた意。君を見失ひて浮かれ船になつたと欺かれたのをいふ。

【引出者】 贈物のこと。饗宴の時、主人より

客への贈物。〔天國〕和訓栞に「江次第に遣_二曳出物、馬二匹_一並送_レ物。北山抄大鑿の條に率出物に馬鷹あり、名義知りぬべし。」とあり。

【仙家に入りし身の云々】續齋譜記に出づ。和漢朗詠集に後江相公「謬入_二仙家_一雖爲_二半日客_一、恐歸_二舊里_一終逢_二七世之孫_一。」

【大場】名は景親、平三郎と稱す。嘗て罪あり斬に當る。平氏の救済によりて免る、依て平氏に盡す。保元の亂源義朝に従ひて白河殿を攻む。治承四年頼朝を石橋山に破り、後之に降りて周瀬川に斬られた。

【なんぼう】なにほど。如何ほど。〔天國〕

【不覺の涙】覺悟のない爲に流す涙、未練の涙。

【何か包まん唐衣】古今集、讀人知らず「猶しさを何に包まむ唐衣、袂ゆたかにたてといはましを」によつた。此の歌は嬉しさの袂にも餘りて包みきれぬ心であるが、こゝには涙の包みきれぬ意に用ひた。

【日も夕暮に】「衣の紐結ふ」をいひかけた。

【月の盃とりどりに】日暮れて月の出づるを、盃の形容に續け、盃を取るといふを「とりどり」にいひかく。「とりどり」はめい／＼それぞれにの意。

【時日をめぐらさず】月日を經ずしての意。

【掌に治め給へる】掌中に天下を治むる意。

【めでたき始も實平云々】頼朝が天下を統一せられたのも、全く實平の忠勤によつてで

鑑賞

室町期は鎌倉期の後をうけて清雅枯淡の文學を生み出した時代である。武士階級に歡迎された讀曲がその特色を多分に含んでゐることはいふまでもない。その修辭法上最も多いのは懸詞である。身は捨小舟うらみても、かひなきや憂世なるらん。

飛び立つばかりに思ひ子の云々。

何か包まん唐衣日も夕暮になりぬれば月の盃とりどりに。

忠勤の道に入る弓矢の家

等である。その多きは一曲にして十數に達してゐる。次に屢、用ひられたのは引用法で此の曲では、

龍門原上の土に屍を曝す。(一八二頁)

彼の松浦佐用姫が云々。(一八六頁)

たとへば仙家に入りし身の云々。(一九二頁)

何か包まん唐衣云々。(一九二頁)

而して此等の引用あまりに繁に過ぐる所は、其等出典の知識なきものには難解なる詩歌の拉列たるに止まり、又それ等をよく熟讀せるものには朗詠や、古今や、源語や、平語の雜然たる拔萃帖を見る如く、之れに依つて生ずる聯想の不統一を來す恐あれど接合の巧なる所は、古文詞のあらゆる粹を集めて七寶の燦然たるが如く朗々誦すべきものがある。次に謡曲の特徴とも謂ふべきは其の用語の優麗なるにも似ず、その行文の簡結なことである。又その句拍子即ち各句連接の間に存する聽覺のリズム的美感のため朗々誦するに甚だ都合がよいのである。

補 説

謡曲について

王朝の物語、鎌倉時代の軍記物が、其各時代の代表的散文なる如く、謡曲は室町時代の代表的散文なり。

謡曲は之を舞踊の方面より見るも文詞の方面より見るも、一種の折衷文藝なり。即ち舞の手には在來の田樂、猿樂、久世舞、亂舞幸若舞、延年舞、宴舞、曲舞等を折衷し、曲節に聲明、今様、朗詠、平曲を斟酌し、材料を勢語、源語、平語、其他已往の物語傳説に採り、之を綴るに和歌、物語、催馬樂、今様、朗詠、古詩、佛典を混用したる文詞を以てす。

後嵯峨院の時、田樂（平安朝の末、農民田植の勞を慰めんが爲に笛鼓を鳴らして踊り舞ふ、之を田樂といふ。後には田植ならざる時にも之を行へり）専ら流行して猿樂は之にけふされつる勢なりしより、大和の猿樂師圓滿（金春の先祖）之を歎き當時流行せし白拍子、曲舞、延年舞等のふりをも參酌して十六章、曲舞の文版をつくりしもの、即ち當代猿樂能の濫觴なり。而して當時猿樂の諸座はひとり大和に限らず、近江にも河内にも、丹波にも、攝津にも、伊勢にもあり。近江には山階、下坂、比叡の三座ありて、日吉の神事に従ひ、河内には新座あり丹波には本座あり、攝津には法成寺座あり。何れも加茂の神事に従ひ、各社定まれる舞員あり、之を能の大夫と云ふ。

その流派には五座あり。觀阿彌、世阿彌の流を汲みしものを觀世といひ、今日最も廣く行はる。外に奈良、圓滿井より出でしものを金春、同戶山より出でしものを實生、同坂戸より出でしものを金剛と云ひ、外に喜多流あり。

内容上より之を分類すれば、神事に關するもの即ち神事能、及び祝言能、精靈能、人事能等あり尙は一、鬘物（戀愛を主としたるもの）二、修羅物（武勇を主としたるもの）三、狂女物（狂女を主人公としたるもの）四、古代物（精靈もの）五、現世物（人事に關するもの）とせるもあり。（三浦氏、綜合日本文學全史による）

研究參考書

一、全般に對する概念を作るには

大和田建樹著——能と謡

池内信嘉——能の見方謡の聞き方

謡曲講座

豊田徳治——謡曲十講

二、趣向と略筋を見るには

大和田建樹——能の葉

和田萬吉——謡曲物語

丸岡桂——古今謡曲解題

友常秋美——謡曲と狂言

瀬尾武次郎——謡曲の研究

英雲外——謡曲と佛教

三、註釋書には

大井貞恕——謡曲拾葉抄

大和田建樹——謡曲評釋

正田章次郎

雨谷 幹——能樂大辭典

鈴木暢幸——謡曲講義

蜂谷時順——謡曲辭典

四、脚色、修辭に關しては

藤岡作太郎——國文學史講話

芳賀矢一——國文學史概論

五十嵐力——新國文學史

五、沿革的考證につきては

小中村清矩——歌舞音樂略史。

高野辰之——日本歌謡史

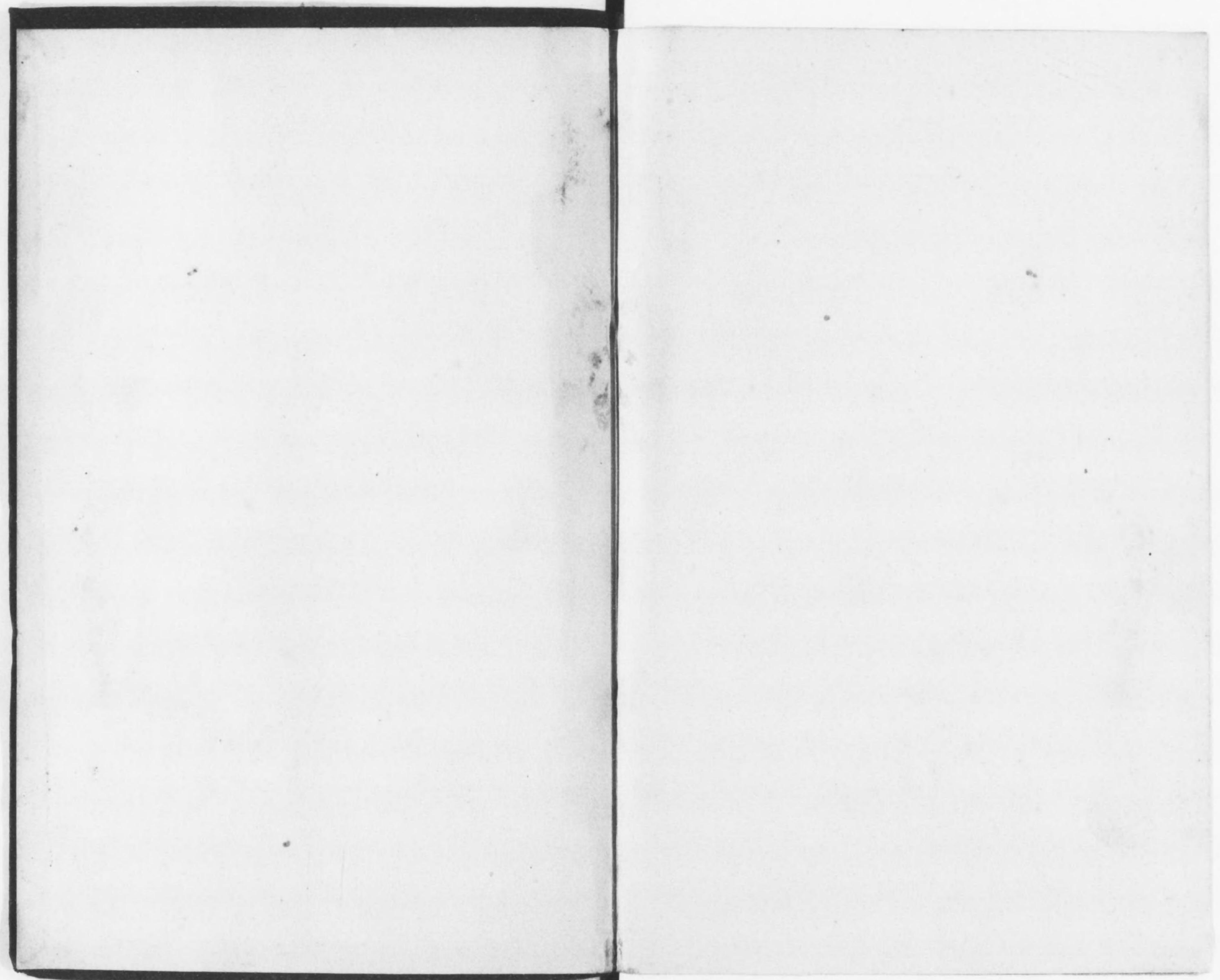
池内信嘉——能樂盛衰記

新國文大綱卷六備考(終)

昭和三年十月一日印刷
昭和三年十月五日發行

〔非賣品〕

發行所	著作權所有	
	編輯者	立川書店編輯部
發行所	發行者	立川熊次郎
	印刷者	北隅茂
<small>大阪市西區阿波野二丁目三番地</small> 立川書店		<small>大阪市西區安堂寺橋通三丁目四十五番地</small> 立川書店



終

